

故」といふと「古來の習慣であつても、理由の無いものは廢するが宜い」といふやうに、凡ての物事を理窟で解決しやうとし、合理的でないことは、すべて破壊せんとする傾向がある。此の如く此時期は理窟に馳する時である故、幼時には別に何とも思はなかつた事物に對しても、その原因結果を考へるやうになる。即ち事物の關係を考へるやうになるのである。

次に二十五歳より壯年期即ち三十歳位になるまでには、論理的記憶が發達して來る。即ち物事を記憶するに、其必要的關係を捉へ、次第順序を立て、記憶するの力はますます加はる。併し機械的記憶はだん／＼衰へる。故に此時期には、歴史地理に於ける年代、人名、地名、事件の顛末語學などの記憶は不得手になつて、數學、理化學等一般に或る理由に關係しての事物の變化をよく理解し之を記憶することに長じて來る。

更に三十歳乃至四十歳頃には、現實的興味即ち現在の實生活に大そう興味を有する様になる。青年に於ける空想、老年に於ける過去の追懷は、共に此時期の人の興味を惹かぬ。現實のことが最も面白く感ぜられ、活動することが最も興味を惹く。故に此時期には、理窟をいふよりは直ちに實行に訴へやうとする傾向がある。例へば「此家の庭の造方は面白くない。どうか少し變へてみたい」といふやうな事も、唯考へてゐるのみならず、直ちに實行に取りかゝるといふのが此時期の特徴である。

四十歳乃至四十五歳位になると、性格確立とて、其人の性質が定まる。善い性質も悪い性質も此時期に至つて固まるのである。孟子が「我れ四十にして心を動さず」と言つたのは、即ち此間の消息を語るものである。

四十五歳乃至五十歳に至ると、何をすることも前後を考へ周密の注意を拂つて後に行動する。これを思慮的行爲といふ。通俗に「分別盛り」といふのは即ち此時期である。又それと同時に自らを恃む心、即ち自負が強くなる。但し茲に注意すべきは、自負と自慢とを混同してはならぬ。自慢は自分の實力の有る無しに拘らず、人に向つて實力以上に銜ふの謂であるが、自負は「このことは自分でなければ出来ぬ」といふやうに、自分で自分を信することである。かく自負心が強くなる爲めに、此年頃の者が青年を見れば、「自分等の若かつた時にはもつと働いたものであるが」などと、現在の青年が役に立たぬやうに思ふのである。斯ることは此時期の人の深く誠むべき點である。

更に進んで五十歳乃至六十歳に至れば、一般に神經質になる。併しそれは病的現象ではなく唯短氣になり、怒り易く、物事に飽き易く、小事にこせついで、少しのことでも口やかましく小



言をいふやうになる。前に述べた舅や姑は多く此時期の人である。然るに嫁は、空想が旺盛で將來のことなどを想像してゐる時代の人であるゆゑ、衝突を免ぬれのである。故に此年頃の人は一體に神経質であることを知つて、其病に觸れぬやうにせねばならぬ。また當人は、この年配には誰も神経質になるのであると思つて、己を制し、小事に拘泥せぬやう自制せねばならぬ。此時代にはまた怯懦になる。さなきだに熟慮的なる此年頃の人は、物事を決行するの勇氣に乏しく、逡巡する傾向がある。革命などを起すものは、二十歳前後の頃に多い。若しも五十六十の年配の人が革命でも起すことがあつたら、それは自ら發動的にするのではなく、他より推された場合である。

次に六十歳乃至六十五歳になると、頑固になる。併し頑固というても必しも悪い意味ではない。自己の行を善と信じて、其所信を枉げぬのであるゆゑ、其所信が誤つてゐる時は弊害があるけれども、正しい場合には價値のあることで、徒らに新奇にのみ趁るものに比し、遙かに優つてゐる。併し頑固に過ぎるため、新しいことを受容する力は乏しく、現代に接觸することが出来悪くなる。

六十五歳より七十歳位にもなると、人は一般に現在忘却とて、眼前のことを忘れてしまふやう

になる。即ち二三日前のことを忘れて、却つて二十年三十年前のことをよく記憶してゐる。故に自然に過去憧憬をするやうになる。即ち昔が戀しく思はれるやうになるのである。

七十歳乃至八十歳に至れば老耄する。老耄とは、物事を忘れ易い上に、進んで物事を想像することも乏しくなる状態である。此年頃には、自分では老耄したとは思はぬでも、他より見るとそれが明に分つて来る。老耄すると想像力が働かぬゆゑ、若い者のやうに想像の豊富なる詩歌などを作することは出来悪くなる。また老耄して来ると、次第に感情も衰へ推理思考さへ出来難くなるのである。

八十歳乃至九十歳に達すれば、現實興味失却の現象を來す。即ち現實社會に興味を失ひ「この様な世の中はいやになつた。早く死ぬ方がよい」といふやうになる。斯の現象は老人になれば誰にも有ること、現世は混沌として道德もなく宗教も無いやうに思はれて来る。「自分の若い時代には世がよく治つてゐたが、今日は無茶苦茶である。世は澆季になつた」などと憤慨する。

人が愈々死に近くなつて九十歳乃至百歳にもなれば、未來憧憬とて、現世に厭き、未來を戀しく思ふやうになる。随つて宗教を要するやうになるのである。

以上は大略の説明に過ぎぬが、人生は概して斯の如き順序に進むものである。故に此事をよく



記憶に仕めて置いて、人に事へるにも人を使ふにも参考に供するがよい。各時期の特色と、自己の過去の想出とを比較してみると、必ず一致することが多いであらう。然るに其等の時期に、それ相應の精神的特徴の現れなかつた人は、何等か人並ならぬ缺陷のある爲めである。右の表中、「思想作用」以上を兒童期とするのであるゆゑ、それ以下は兒童の事を説くに必要のない如く思はれるけれども、發達の順序を示すため、且また兒童の心は成人のものと通じてゐることゆゑ此にその大略を説明したのである。

以上の如く人生過程には三期があつて、精神の發達及び活動力の強弱より觀て、上昇する時期、平衡を保てる時期、及び下降する時期がある。之を腦の發達と對照してみると、上昇期は即ち腦の目方の増加する時に當り、平衡期は腦の目方の増減の少い時に當つてゐる。而して腦の目方が次第に減じて、五十五歳乃至六十歳位に至ると七八歳の子供のものと同じ位になり、また七八十歳に至れば、四五歳の子供のものと同じ位になるが、これ即ち下降期に相當するのである。此の如く、心身の發達と腦の發達とは、常に一致併行してゐる。但し老人の腦が、幼兒の腦よりも軽くなりたりとて、直ちに子供の如き精神になるものではない。これ長い人生の道途を経て、大脳皮質に刻まれた經驗がある爲めであらう。換言すれば其量は同一であつても、其質に差異があるのである。

### 第三章 兒童期

上述の如く出生より二十五年の長い間を兒童期と呼ぶのであるが、研究其他の便宜上より、更に之を若干の小時期に分割する。これは心身の特色に依つて分つたのであるが、普通に五期に分つ。即ち母の胎内にある間を胎兒期、出生より生後三年までを嬰兒期、三年乃至七年を幼兒期、七年乃至十五年を少年少女期、十五年乃至二十五年を青年期とする。次に是等五期の特色を説明するのであるが、今一目瞭然たらしめる爲に之を表示すれば次の如くである。



表 質 特 期 各 童 兒

意 志	情 操	思 想	欲 望	情 緒	表 象	衝 動	單 心	感 覺	精 神 作 用
	發 達			運 動		生 長			發 育 特 質
系 統	生 殖	神 經	系 統	筋 骨		系 統	消 化		中 心 系 統
期		青 年	少 女 期	少 年		幼 兒 期	嬰 兒 期		時 期 名 稱
成 型		第 三 充 實	第 二 伸 長	第 二 充 實		第 一 伸 長	第 一 充 實	平 衡	發 育 律 動
二 五		一 七	一 五	一 一		七	三	一	年 齡

兒童期を身體の狀態に基いて更に小時期に區分するの標準は、發育律動である。これは前にも述べたが、兒童の發育が、身長伸びる時期と、身幅の發育する時期と、律動的に交互して現れて来るのをいふのである。兒童は出生より一年までの間は、縦も横も急速に發育する。されば初生兒と生後二箇月も經過したるものとは、發育狀態が非常に異つてゐる。即ち身長も身幅も體重も著しく増して居る。然るに生後一年より滿三年頃までには、第一充實期と稱して、身長伸びるよりも體重の増加の方が勝つて、子供は肥つて来る。勿論身長も増加するのではあるが、體重の方が餘計に増すのである。次に三年より七年頃の間、即ち幼稚園時代には、身長の方の伸び方が多いので、全體がすらりとして来る。幼稚園の子供は、初めは第一充實期に近い爲に、むくむくと肥えて居るが、中頃より後は、病氣の爲などでなく生理的にすらりと幾分瘦形になつて来る。此時期を第一伸長期と呼ぶのである。次に學齡期に入り、尋常二三年頃になると、第二充實期に入る。即ち男兒は七八歳より十一二歳位まで、女兒は同じく七八歳より十歳か十一歳位まで體重の方が餘計に増す。次で第二伸長期に入り、身長増加が著しくなり、一年に一寸五分乃至二寸、時には三寸若くは五寸位も伸びることがある。而して、この時期が凡そ十五六歳まで續く。男兒は時として十七歳位までも伸びて、僅々一年の間に從來の着物が皆役立たぬやうになる



ことさへある。而して女兒の身長しんちやうの男兒だんじに優るまさのは此時期このじきである。併し後には或る例外れいぐわいを除いて普通ふつうに男兒だんじの身長しんちやうは、女兒ぢよじのそれを追越おひこすに至る。即ち女兒ぢよじは發育はついくが早く終るのである。かくて第二伸長期だいにしんちやうきに次で第三充實期だいていじつしきが來て、約二年やくにねんほど繼續けいぞくするが、その後は個人こじんに依つて瘦やせたまふに、或は肥ふとつたまふに、略ぼ身體しんたいの型かたが定まる。之を成型期せいけいき又は成熟期せいじゅくきと稱して、人種じんしゆに依つてそれ々々の型かたが出来る。斯る發育徑路はつしゆくけいろは、人種じんしゆの如何いかんを問はず凡て兒童じどの經過けいごする所である。故に豫め是等の事實じじつを了解れうかいして居れば、或る時期じきに子供こどもが瘦やせたりとて敢て驚おどろく必要ひつやくもなく、また肥ふとたりとて特に喜よろこぶ理由りゆうも無い。

次に兒童じどの各期かくきには世間普通せけんふつうに呼ばれてゐる所のそれ々々の名稱めいしやうがある。是れ所謂時期名稱すゐろじきめいしやうである。我國わがくにに於ては生後三年せいごさんねんまでは之をみどり子こすなは即ち嬰兒えいじと稱する。元來英語ぐらんぐわいごに於て嬰兒えいじをインファンシー Infancy. といふのは拉丁語ラテンゴから出て物の言へぬことを意味する。又支那文字またしなもんじの嬰えいといふ意味は「抱いだく」ことである。即ち兒童じどが幼こくして歩行ほかうすることを得ず、父母ふぼに抱いだかれてゐることを意味するのである。併し現時げんじは更に發達はつたつした後をも嬰兒えいじといふのである。嬰兒えいじの終はりには既すでによく歩みよく語るやうになる。此時期このじきより後を幼兒えいじと稱し、身體しんたいの形態けいたい及び精神せいしんの特質とくしつ等の上うへに男女だんぢよの性別せいべつがまだ現れぬ。これが六七歳さくさくまでも續く。次に學齡期がくれいに達すれば、男兒だんじ女兒ぢよじの別

が明あきらになる。所謂少年少女せいねんせうぢよである。此時代このじだいに至れば兒童じどの身體しんたい及び精神せいしんの狀態じやうたい、遊び方あそびかた、興味きうみ等とうすべてに男女だんぢよの差異さがいが生じて來る。最後に十五歳さいごより二十五歳さびくろ位までを青年せいねんといふ。此時期このじきは兒童期じどきの終はりであつて普通ふつうにいふ狹義けいぎの兒童じどと成人せいじんとの中間ちうかんに位し男女だんぢよの別べつがますます明あきらになり身體精神しんたいせいしんすべての作用さようが盛んに現はれる大切たいせつの時代じだいである。

#### 第四章 兒童各期の特徴

兒童期じどきの區分くぶんは之を精細せいさいにすれば多くに分ち得るが、大體だいたいに於て前章ぜんしやうの末すまに擧げた如く嬰兒えいじと幼兒えいじとを一期いきとし、少年少女せいねんせうぢよ及び青年期せいねんきを加へて、三期さんきに分類ぶんるひするのが、便利べんりである。(胎兒たいたいを省はぶく)さて人には、骨ほねもあり筋肉きんにくもあり、心臓しんざう、血管けつわん、血液等けつえきとう、種々の機關しゆくくがあつて、皆統一みなとう的に作用さようして居る。併し或る時期じきには或る機關系統くわんけいけいとうが他のものよりもより盛んに作用さようするものである。嬰兒えいじ及び幼兒えいじに在つては、胃腸ゐちやうの如き消化系統せうわけいけいとうが盛んに活動する。故に此系統このけいけいの作用さようを中心ちゆうしんとして種々の作用さようが働はたらく。此時期このじきの子供こどもは、今何物いまなにものかを食しつとと思ふと、また直ぐに食物じよくもつを要求せうきうする。而かも大人おとなよりも比較的ひかくてきに多く食しつする。然るに老人らうじんになると、消化系統せうわけいけいとうの作用さようが衰おとろへるゆゑそれほど多く食物じよくもつを要求せうきうせぬやうになる。然らば此時期このじきには何故なにゆゑに消化系統せうわけいけいとうの作用さようが活潑くわつぱつである



かといふに、それは發育特質として現れる所の生長の爲である。生長とは分量の増加を意味する。此時期は身長増加、筋肉及び骨、内臓の生長等、すべて身體の生長する時である故、毎日の活動に費すだけの栄養では足らぬ。故にそれ以上に更に生長に要する食物を攝取せねばならぬ。随つて多く食することになる。

然るに壯年に至れば、自己の活動に費消したエネルギーを補へばそれで足るのであるゆゑ、兒童ほど多くの食物を要求せぬ。大食すれば却つて腸胃を害する虞がある。老人になると、活動に費すエネルギーの量も少く、随つて少食を以て之を補ふことが出来る。故に壯年に比して一層少食になる。随つて、老人が自己の攝取する食物の分量を以て子供のそれを制限するが如きは甚しき誤謬である。私は成人でもこれだけで足りる。お前は子供の癖にその様に多く食べずともよい」といふ訓誡は、全く間違つて居る。實に此時期の子供の攝取する食量は、強き労働をする者のその三倍に當つてゐる割合である。故に過食はよくないが、必要量の食物は一定時に之を與へねばならぬ。我國一般の習俗の如く、お八つとて砂糖菓子などを多く間食させるのは不可である。子供は間食の害を知らぬゆゑ、空腹に委せて、多くを要求し、お八つを以て腹を満たさうとする。之が爲に胃腸を害することになる。故にお八つが必要ならば、握飯か薩摩芋でも與へるが

よい。西洋では心ある親は、パンを焼き普通のご飯時のやうにしてそれにバターかジャムかを着けて與へる。如何なる場合でも菓子などで腹を満たさせるのは有害である。

次に學齡期即ち少年少女期に至れば、筋骨系統即ち筋肉と骨格との方面が盛んに發育するやうになる。就中骨格系統の發育は、男子よりも女子に於て早く盛に行はれる。少年少女期の終即ち青年期の初めに達すれば、筋骨の發育の急速なるがため種々の現象を呈する。例へば、神経痛のやうに身體の各部が痛むことがある。これは骨が急に發育するに拘らず、筋肉の發育が之に後れるため、引張られて痛むのである。此の如く筋肉の急速なる發育は、運動を盛にする爲である。學齡期の兒童は、暫くも靜止することなく、常に駆け歩くものである。故に靜に坐ることを好み或は好んで靜に腰掛けて居るが如き子供は、概ね病身である。健全なる子供は、角力を取つたり蜻蛉を逐ひまはしたり、花卉を折つたり、常に運動して靜止することの少ないものである。これ運動するために筋骨が發育し、また筋骨が發育する爲に運動を起し、兩者互に原因となり結果となつて兒童を刺戟する爲めである。故に此時期の子供を教育するには、運動を中心とせねばならぬ。然るに學校より歸るや否や、既に五時間も授業して來たものを、更に机の前に坐らせやうとするのは、自然の發育を害し、神経衰弱などに陥らしめる虞がある。されば、休日には海岸なり



野原なりに伴うて自然界に接觸せしめるがよい。運動を奨め、之に應じて充分營養を與へることは、即ち此時代の特質に應じた教育法である。

十五歳から二十五歳位、即ち青年期に至れば、神経系統及び生殖系統が中心となつて活動する。幼児にも無論神経系はある。併し其發達が完成に近づいて盛に活動するのは、青年期になつてからである。神経系は、何人も知るが如く、腦の中樞と、其中樞から全身に絹絲のやうな細い纖維の派生せるものから成つてゐるので、その機能が精巧になるのは、實に青年期に於てである。次に從來眠つてゐた生殖系統は、此時期に始めて覺醒して、男女の性が完成する。その成熟は、氣候、個人、環境、人種等の別に依つて幾分異つてゐるが、我國に於て女子が眞の女となる平均年齢は、十四年八箇月である。此時期に於ける此等兩系統の活動して來るのは、即ち身心が發達して來た爲めである。發達は生長と趣を異にする。生長は單に身長、體重等量の増加を意味するが、發達は質の複雑になる事を意味する。初め幼児の頃は、見聞時代ともいふべく、單に物事を何の意味もなしに其儘取り入れて居たのであるが、此期に至れば、事物の原因結果を思考するやうになる。即ち幼児の頃は、心神ともに主として生長して來たのであるが、此期には主として發達を遂げるので、その爲に機能が精細になるのである。

此の如く生長と發達とは、量と質とに關係を有する點に於て異つてゐる。例を以て更に説明すれば、此に山出しの女中があるとす。彼女は何の教育もなく、毎日野山に出て勞働してゐたので、手足などが随分大きい。即ちよく生長してゐる。體量實に二十貫もあらうといふほどである。併し彼女はよく發達して居るとはいへぬ。即ち手指の働などは至つて無器用であつて、毎日大きな粗い仕事のみ仕て來たので、小さな針仕事などは出來悪い。細い針を握らせると、すぐに折つてしまふ。疊針でも持たせねば續かぬ。然るに之が小學校より女學校と次第に教育を受けて、神経系のよく發達した人になると、指先が精細に働くので、裁縫も出來れば細字も書ける。此の如く生長と發達とは其性質を異にしてゐる。從來幼稚園の保育法の非難を受ける一の理由は此事を無視してゐる事に存する。即ち未だ發達して居らぬ幼児に對して、既に發達した人のなすべき綿密な細工などを課して居るが、之は順序を誤つて居るといふのである。

上述の如く、幼児の頃は主として生長する時代、少年少女期は運動する時代、青年期は發達する時代と、夫々大體に發育の特質が定つてゐる。故に兒童の教育には、其時期によつて、其頃の特質に應じた教育を施さねばならぬ。少年少女期は盛に運動する時代であるのに、之に對して、青年期即ち主として發達する時期に施すべき教育法を用ひては、却つて害になる。然らば青年期



は發達する時期として、その教育法は如何にすべきかといふに、綿密なる仕事、精細なる思考を要する精神作業を課すべきである。それを粗大なる事のみを課して置いては、完全に發達することが出来ぬことになる。女子が十四五歳の少年少女期に於て嫁に行つて、青年期の婦人のなすと同様のことをするのは、青年期を經過せずして、直ちに壯年期に入るのと同様である。また男子が十二三歳にして他に備はれて、大人の仕事をするのは、青年期のことを経験せぬのと同様である。故に心身に缺陷が出来る。されば兒童をして青年期の特色を十分に發揮し、此時期のことを経験せしめることが大切である。餘り早く成人同様に現實生活に交渉させると、發育は害せられる。

人類の精神作用は大約三段階の發達を遂げる。而して其發達は、動物が最下等より稍や高等のものへ、それより更に高等動物へと進化するが如く、一階段毎に進歩したるものになる。第一階段は七歳以前、即ち幼兒期までを含む。此時期には精神作用の諸要素中、感覺が盛に働く。感覺には、味覺、嗅覺、視覺、聽覺、皮膚感覺、有機感覺等の種類があつて、吾人の精神生活の材料は、實にこの感覺に依つて獲得せられるのである。感情の如きも、單純感情として、感覺に依つて生起せられるものが主に現はれる、されば憎惡、怨恨、嫉妬、喜悅、感謝、恐怖の如き複雑なる

情緒は極めて乏しい。また意志の如きも、熟慮したる後に行ふにあらずして、衝動として殆んど無慮、無意識に動作するのである。概して此時期の精神作用は、將來發達する精神の萌芽であつて、その感覺は知の材料を作り、單純感情は情緒及び操情に、衝動は欲望、執意にと發達してゆくのである。幼兒期以前の知情意の作用は、此の如く感覺、單純感情及び衝動などから成つてゐる。

次に第二段階は學齡期であるが、此時期には、單に感覺するに止らず、外界の事物を心中に取り入れ、これを記憶し居り、必要に応じて再生憶起する。この心象を表象と名ける。この表象がある爲めに、縦令目を閉ぢても、雀、猫、山、河、海等あらゆる事物の形象が頭の中に浮んで來るのである。學齡時代は表象の最も盛に出来る時であるゆゑ、幼稚園や青年期の教育よりも、小學校の教育が最も大切なのである。小學時代は感覺に依つて外界のあらゆる事物の形象を取り入れる時、即ち吾人將來の精神生活の材料を作る時であるゆゑ、極めて大切な時期である。

次に感情の方面では、單純感情よりも、更に複雑なる情緒が現れる。情緒とは所謂喜怒哀樂愛惡欲として、古來七情と呼ばれたものと、大體に於て一致する。また意志の方面に於ては、前時期までは、自己を刺戟する物があれば、唯その刺戟に驅られて、殆ど無意的衝動的に手を出した



ものであるが、此時期には全く衝動的ではない。或る一定した物を欲求する。併しまだ克己自制の力が發達して居らぬゆゑ、欲望に驅られて、手段を考へずに無謀のことをすることさへある。一體此時期の行爲は習慣となり易い。随つて、幼稚園の頃には別に惡癖のなかつた者が、學齡期になつて悪くなるといふやうなこともある。要するに此時期には、善くも悪くもなり易い時である故特に注意せねばならぬ。

第三段階の青年期に至れば、或る一事物を見聞しても、單に表象として把住するのみでなく、思想するやうになる。即ち物と物との關係や原因結果の關係を考へる。感情も亦情緒よりも更に複雑にして、知性と關係の深い情操が發達する。即ち道德、宗教、科學、哲學、藝術等、眞善美に關する文化的感情が現れて來る。青年時代に斯る情操の起らぬ者は、不完全の人であつて、道德的言行に對しても喜ぶことなく、罪惡を以て耻と思ふこともなく、また繪畫や彫刻を見ても美しいとも思はず、音樂に對しても美感を喚起することもなく、或は神佛や人格の高い人に對しても何等の尊敬も憧憬も感ぜぬ。かゝる人物は、精神に缺陷ある者である。情操の缺けたる人、又はその乏しき人は、劣等の人である。故に今日に於ては、世界到る所斯る高尚なる情を養うことに努めるやうになつた。

従來下層勞働者が劣等であるといはれたのは、斯る情操に缺けて居た爲である。それと反對に上中流社會の者の高雅であるのは、斯る高尚なる感情が養はれて居る爲である。故に高尚なる感情の涵養は、今日廣く世界に其必要を認めらるゝに至つた。職業の如何にかゝはらず、貧富の別なく、人は高き情操を養ひ、高尚なる人格を修養せねばならぬ。次に意志の方面としては、從來の如くに無意的衝動的に行爲することなく、其行爲の結果を思慮して、意志的に行動するやうになる。前に執意といつたのは即ちこの狹義の意志、換言すれば思慮的行爲を指すのである。故に青年にして尙ほ衝動的に動作してゐる人は、極めて發達の遅れた者である。

兒童期に於ける知性發達は全體に於て三段の發達を遂げるものであることは、上述の如くであるが、その階梯を代表する疑問の三形式がある。即ち幼稚園以前の兒童は、其物事を尋ねるに、多くは「何?」Whatといふ語を用ひる。これは知性發達の最も原始的の階段であつて、「これは何?」と物の名を尋ねるのである。之に對しては、單に答をすれば幼兒は満足し、その眞偽適否は問ふ所では無い。故に猶更父母長上が幼兒の疑問を重視し正當の答をしてやらねばならぬのである。然るに學齡期に達すれば「如何に?」Howといふ問を發するやうになる。即ち唯だ何であるといふだけでは満足せぬ。その事物がどうなつて居るかを知らんとして、中を視たり、引



くり返へして視たりする。即ち前の如く、一の感覺に満足を與へただけでは濟まらず、種々の感覺を働かして、事物の表裏を觀察して其物の實狀を知らうとする。更に十四五歳以後の兒童は、「何故?」Why といふことを、問ふやうになる。詰り事物の因果を探らうとするのである。これは誰でもよく注意して自己の發達して來た過去を反省して見れば明に分ることである。即ち誰も幼時には事物の名目だけを問うて満足するが、學齡期に至ると、その狀態を知らうとし、青年期に至ると、其等事物の原因結果を明らかにせねば満足せぬやうになる。斯る發達は普通の順序であるが、時として十歳又は十一歳にして、普通十五歳以上の兒童の發する如き質問をすることがある。これは發達の早い爲である。この「何?」「如何に?」「何故に?」といふ疑問の三段の發達は、人の知識の發達上必ず經過する所の形式である。

### 第五章 兒童發育の原理——約説原理(又反復原理)

抑々兒童が育つには如何なる順序で進むものであるか。例へば、前章に説いた順序でも、唯人間に於てのみ斯る順序を経過するのであつて、動物全體の原理といふことは出來ぬであらうか、それとも又動物一般に斯る順序を経るのであらうか。これ本章に於て説明せんとする所である。

昔は人類の子供が育つてゆくのは如何なる順序であるか。その發育の意味が分つてゐなかつた。然るに今日では約説原理即ち反復原理の發見に依つて、兒童發育の意味が明になつた。この原理は如何なるものであるかといふに、一體人は母の胎内に宿ること約二百八十日にして、其間に單細胞とて顯微鏡の力を藉らねば見えぬやうな小さい物より、次第に發育分化して、始めて人として生れるのであるが、其間の發育の徑路が、恰も下等動物より人類にまで進化して來た吾々の祖先の進化史を繰返へしてゐるのである。これを約説原理又は反復原理といふのである。

つまり個體の發生徑路は種族の發生徑路を反復してゐるといふことになる。即ち人類も胎内に於ける或る時期には魚の子と同じやうに鰓が出來又或る時期には獸のやうに尾が出來身體に毛が生える。これは種族の進化して來た過程を反復する證據である。故にその初めは人の子であるか魚や鳥の子であるか乃至獸の子であるか外形上では辨別し難いのであるが、次第に人は人とし獸は獸としてそれ々の形態を具へるやうになるのである。これは腦髓の發達に於ても見ることが出来る。即ち腦髓も最初は下等動物のものゝ如き狀態から漸次發達して、一般人類の有するものゝ如き狀態に至るのであるが、其後も亦野蠻人の腦髓の狀態を経て文化人の有するものへと漸次進化するのである。



有脊動物の腦髓を比較して見れば、その最下は「なめくぢ魚」で、これは脊髓の部分が絲のやうな形をしてゐる。それが稍や高等なる魚類になると、大脳の部分が少し膨れてゐる。更に龜、蛙などの如き兩棲類になると、大脳は一層よく發育し、鳥類になると魚類よりも一層發育してゐる。これ鳥類は兩棲類よりも智慧があり、また兩棲類は魚類よりも伶俐なる證據である。併し鳥類の大脳には未だ皺襞がない。それが哺乳類、例へば鼠、猫、兎、犬などになると、智慧も進み随つて大脳の分量も多く、其面に皺襞が出来る。この皺襞は人類に至つて最も多い。然かも野蠻人よりは文化人により多くある。故に大脳の皺襞の多いほど智慧が多いと、概言することが出来る。また同じ文化人に在つても、子供の腦の皺襞は大人のそれよりも少い。これ子供は大人の如く精神作用が發達して居らぬ爲めである。併し生長と共に漸次増加して来る。今其發育状態を觀察すると、嬰兒の時代は鳥類の大脳に類似のものを有する時である。それから猿の大脳ほどに發達し、漸次、野蠻人、半開人といふ順序を経て、青年期の頃に、始めて文化人の有するが如き腦髓を持つやうになる。

上述の如く、人は皆下等動物の状態より漸次に高等の域に發達するものであるゆゑ、そのことをよく頭に入れて置いて、子供の自然の發達に成るべく無理のないやうに育てねばならぬ。立派

な家庭に於て、幼児に餘り嚴しい教育を施して、其發達を害するのは、幼児は野蠻人に相當するといふことを知らぬ爲めである。三歳以下の嬰兒の頃は猿と同じ階級に居り、幼稚園より小學校にかけて野蠻人の位置に進み、青年の初期に半開人の域に進んで非常に生氣になる。これが自然の發育順序であるゆゑ、野蠻時代の兒童に向つて、文化人の禮儀作法を強ふるのは、無理である。約説原理を理解し居れば、子供が一般に亂暴である理由も解る。

併し自然の發達を害せぬ爲めとて、亂暴なる言行を其儘放任して置いてはならぬ。また漫りに嚴しく折檻してもよくない。斯る場合には、活潑に暴れ騒ぐ其力を、運動の方に轉ぜしめ、有益に利用すべきである。また十二三歳の位の男の子は、野蠻人としての性質を發揮するので、非常に我儘であつて、人の言ふことを聽かなかつたり、動物を苛めたりすることが多い。これも又漫りに嚴格に取扱つたり、または放任して置いてはならぬ。又物を盗んだり、喧嘩をしたりすることも、此頃より始まる。遊戯に於ても、鬼遊び、隠れん坊、旗取などを好んでする。故に斯る時期には野原に伴うて昆蟲を捕へさせたり、植物を採集させたり、或は害蟲驅除をさせたり、その勢力を有益な方面に轉ぜしめるのが一番よい。かくする時は、精神の自然の發達を助け、身體の發育を良好ならしめ、兒童教育上一舉兩得の策となる。要するに約説原理は適當に之を教育上に利



用すべきである。

## 第八講 兒童 (二)

### 第六章 兒童と成人

**全身の比** 凡そ人は誰でも自己のことを標準として他人に臨むものである、即ち同情は、自らを以て他を推す所の思ひ遣りであるが、この推論が間違つて居れば、同情が徒勞になる場合がある。此推論は、子供の場合に殊に困難である。老人が、自己の寒い爲めに、子供もさぞ寒からうと推想して、着物を多く着せると、却つてそれが子供には害になる。此の如く大人と子供とは動物の種類が異なるが如くに、總ての點に於て異なるものである。

先づ身體の方面に就いて観ると、外見は大人も子供も餘り相違がないやうであるけれども、よく調べてみると、全身の比例が全く異つてゐる。即ち子供の時は頭蓋が頗る大であつて、脚は短い。それが大人になるに従つて漸次頭蓋が小さくなり、脚が長くなる。勿論身體の何れの部分も生長はするが、其生長する割合が、脚に於て最も大である。初生兒の時には頭部が全身長の四分の一を占めてゐる。而して滿二年になると五分の一となり、滿六年には六分の一に減じ、十五年



には七分の一、二十五年には八分の一となる。併し日本人は歐洲人よりも割合に頭が大きい。然らば脳髓が多くして、より賢明であるかといふに、さうでもない。これは却つて子供らしいとも謂へる。

兎に角何人も子供の時には、割合に頭が大きい。我國人の頭は大體に於て全身長の七分の一と八分の一との間にある。次に初生兒に於ては、身體の中心が臍の上部の邊にある。併し大人になると、脚が次第に伸びるので、其中心が臍下に下る。此の如き身體の中心の變化は、身體各部の變化を示すものであり、また全身の變化は、精神の變化を表はすものである。子供と大人とは、頭部のみを比較しても、子供の時は、脳部頭蓋と顔部頭蓋、即ち頭部と顔部との面積が、八と一との比になつてゐる。然るに次第に成長するに従つて、顔部が大きくなり、終には殆ど二と一との割合になる。更に顔面の高さを較べて見ると、大人は顔が長くなるので、目が顔の上部にあるやうになる。然るに子供の顔は、顔の中心に引いた横線よりも下の方に目、鼻、口などが在る。胸部は、子供の時には著しく前後に膨れ出てゐるが、成人するに従つて次第に平たくなる。尤も大人に於ても強壯なる人の胸は厚く、薄弱なる人の胸は薄い、概して子供の胸は圓く、大人のは扁平である。故に子供の時に大人の如き扁平なる胸部を有して居る者は、非常に薄弱である。

それと反對に、子供のやうに膨れ出た胸を有する大人には、又子供に似て心の發達して居らぬ、所謂低能者が多い。又足を觀ると、初生兒には、土踏まずがなく、全體扁平で、且つ足指に力があるゆゑ、歩くよりも寧ろ木に攀ぢるのに都合よく出来てゐる。歩行し得るやうになるには、腦髓其他全身の發達を要するものであるけれども、また足趾の土踏まずが出来て、反動力が強くなつて來ることも其原因を成してゐる。故に大人になつても土踏まずが出来ねば、反動力が無い爲に歩き悪い。多少は歩いて直ぐに疲れる。大人にして土踏まずのない不具的狀態は、先天的に原因してゐるものもあるが、また固い靴を穿かせるなど親の不注意に依つて出來ることもある。故に子供は素足の儘で置くのが能く發育する。

又外見上に於ては子供も大人も、同じやうに骨が出来てゐるやうに思はれるけれども、約十二歳以下の子供には大人の如く小さい部分の骨が出来上つて居らぬ。故に幼兒には餘り激しい運動をさせてはならぬ。これ骨の發育を害し、畸形に陥らしめる處があるからである。近頃レントゲン光線に依つて透見した結果によると、掌骨の發育の如き、初生兒には僅か二個の骨が出来てゐるのみであつて、大人になるに従つて十個になるのであるが、生後一年三箇月にして三個、三年半にして四個、四年半にして五個、六年の初に八個、七年の初に九個、十二年の初に至り始め



て大人同様十個揃ふのである。

此の如く外見は同一であつて、如何にも可愛い小さい掌であるけれども、其内部には十個の骨の中唯二個が出来て居るに過ぎぬ。然かも其等の骨は、單に形の小さいのみでなく、之を組成せる物質にも差異がある。即ち子供の時には有機分が非常に多い。この有機分は主として膠質であるゆゑ、強靱にして弾力に富んでゐる。故に怪我が少い。縦令怪我しても直ぐ癒る。それが成人するに従つて堅くて弾力の無い石灰質が多くなるので、怪我をすると中々癒着せぬやうになる。

以上の如く子供と成人とは細小なる點に至るまで差異のあるものであるが、就中何人も直ちに心付くことは、歯牙の差異である。子供の歯は大人のと性質も形状も異つてゐる。それに第一に數が違ふ。子供は生後三十箇月にして全體で二十枚の乳歯を持つてゐるが、六七歳頃より次第に脱けて永久歯に代る。この時には大白歯や智歯が殖えて、全體で三十二枚になるのが普通である。この智歯、俗に所謂「親知らず」は、餘り使用されぬので次第に退化して來て、全く生えなかつたり、生えても中途にして腐りなどして、成人に於ても歯牙は二十八枚の人が少くない。生歯は如何なる順序に行はれるかといふと、生後滿一年の子供には六枚生えるのが普通であつて、即ち

上下顎の門歯が出る。一年六箇月になると十二枚、二年になると十六枚、二年六箇月になると揃つて二十枚になるのが普通である。

それが餘り早かつたり遅れたりするのは異常であるゆゑ、相當の手當をせねばならぬ。それは全身の健康を診察して貰ふべきである。以上二十枚の外は、學齡後に生えてくるのであるが、其の抜け代はる際は特に黴菌の入りぬやう口腔を清潔に保つべきである。黴菌は到る處に多く居るものである。我國の齒科醫にして、生後口を洗つたことのない貧兒を調査した報告に據ると、僅か顯微鏡に映る範圍の中に實に一萬數千を算した。然るにそれを清潔に洗つて、含漱をさせてより、更に調べて見たところが、僅かに二三百に過ぎぬやうになつたといふことである。之を以ても含漱の効果の大なることを知り得るであらう。故に食後は大人でも子供でも、清水又は硼酸水で含漱するがよい。かくするときはよく齶齒を防ぐことが出来る。

**體重** 體重的増加も亦年齢に依つて違ふ。元來人の體重は出生時の約二十倍に達するのが普通の發育状態である。健體兒は出生當時約八百目以上の體重を有するものであるゆゑ、成人に達すれば十六貫目以上になる筈である。我國の初生兒は七百五十目より八百目を中心として、時には一貫目以上のもある。故に成人に至れば、其等の二十倍に達し、十五貫目乃至、十六貫目を



中心として、二十貫目位に至る譯である。子供は生後五箇月位には出生當時の體重の二倍となり一年目には三倍、二年目には四倍、四年目には五倍、六年目には六倍即ち大人の約三分の一の重さとなる。更に十年目には八倍となり、十一年目には九倍、十二年目には十倍、二十五年前後には二十倍となる。この體重は、子供の健全に發育してゐるか否かを知る重要な標準となるものであるゆゑ、家庭には秤を備へ置き、時を定めて子供の體重を測る可きである。嬰兒の頃は毎日測る必要がある。初生児は生後一週間位の間は生理的に體重が減するが、其後は健全でありさへすれば漸次増加するものである。體重の多い子供は、學齡期に達して成績が良い。中には體重の少ない者で成績の良い者もあるが、概論すれば前のやうな結果が見られる。故に體重は兒童の發育上甚だ大切な消息を吾人に示すものである。

**身長** 身長は、生時の三・七倍に達するのが一般である。我國の小兒は、大概出生時には一尺五寸以上あるのが普通である。されば之に三・七を乗じた積即ち五尺五寸五分が其人の生長後の身長である。身長は體重よりも増加する割合の少ないもので、五乃至七歳、即ち幼稚園時代の末より小學校に入學する頃までに、出生時の二倍になり、十四年に至つて三倍になる割合である。現時我國人の身長は従来よりも増して來て居る。これ以前の如く坐居することが少く、立つて運動

することが多くなつた爲めであらう。初生児にも一尺六寸位の者もあるやうになつた。この兒が青年に達すれば五尺九寸二分になる筈である。されば此儘で進んだならば、將來は六尺以上の日本人を見るに至るであらう。成人にして身長の高い人は、初生児の頃より既に身長が勝れて生れて來るものである。

**脈搏及び呼吸** 子供と成人との脈搏及び呼吸は異つてゐる。此事は子供を取扱ふ人のよく心得置べきことである。子供は受胎後五六箇月位に達すれば、其心臟の鼓動及び脈搏が外部より計算せられる。胎生期の脈搏は一分間に百四十位であるが、生長後漸次減少して、出生時には百三十乃至百二十の間を上下してゐる。尤も個人に依つて多少の差異はあるが百以上を算することは明である。然るに生後六乃至十二箇月、即ち一年の末に至れば百十五乃至百五を算するに至る。これが成人である場合には、百以上の脈搏は、三十九度か四十度の大熱の時である。尤もチフスは別問題で、これは熱は高くとも脈は却つて少いのであるが、普通の熱病は脈搏を多くする。又危篤の場合などには百四十も百五十も算へるやうになるが、子供はこれが生理的の普通状態である。併し成人すると共に次第に減じて、二乃至六年には、百五至より九十至、十一乃至十四年には八十五乃至七十五至となる。大人に於ては、個人に依つて多少の差異はあるが、七十五



至を中心として、多きは八十、少きは七十乃至七十二三至の間にある。それが六七十歳に達すれば、再び増加する。併し多くとも八十至位で、百至になることはない。之を見ると、大人の脈搏数は、子供の半に達するに過ぎぬ。なほ子供の脈搏を時々診て、其健否を知るやう心がく可きである。

呼吸数も亦子供と大人とは異つてゐる。呼吸は出生時より始まるのであるゆゑ、胎児に於て之を算へることは出来ぬが、初生児に在つては一分間四十以上である。子供は大人に比して代謝機能が旺盛であつて、血液の循環は活潑に、老廢物の排出も多く、呼吸作用に依つて酸素を攝取することも多く、随つて呼吸数も多いのである。かくて學齡期に至れば二十五回より二十二三回に減じ、大人に至れば二十回より十八回位になる。但し急劇なる運動の後、又は羞耻恐怖等、感情激發の場合には頻數になる。

以上は子供と成人との身體上の差異であるが、兩者はまた精神の方面に於ても大に異つてゐる。大人が興味を有してゐるものにも、子供は全く面白味を感じず、却つて其反對なる場合がある。また記憶力の強弱及び性質にも差異がある。例を擧げて説明すると、子供を連れて郊外にでも出かけた場合、大人は海の有様船の往來等、景色の全體に興味を起すが、子供は、父母の眞

似をして「好い景色だ」などいふ場合が有つても、全景に興味を有する爲めでは無い。却つて鳥が飛んで居るとか、人が泳いで居るとか、或る一つの事物に對して興味を起すのである。即ち大人は綜合の上に興味を感じ、子供は個々の上に面白味を感じる。

また例へば、公園などに遊んだ時、歸つて後「今日は公園で何を見て来たか、公園はどんな所であつたか」と問ふと、子供は、公園全體のことを綜合的に話すことは出来ぬ。「鳩がゐた」「犬が喧嘩してゐた」などと答へる。鳩は公園に限つたものでもなければ、犬の喧嘩は何處にもある。けれども子供は、自己の面白く理解の出来ることでなければ頭に留めて居らぬ。此の如く人はすべて自己の最興味を有するものを頭に取入れて記憶するものである。かく子供と大人とは精神が著しく其趣を異にしてゐるゆゑ、子供を取り扱ふには子供の興味、子供の注意する對象を調べて、其結果を教育に應用するやうにせねばならぬ。斯くする時は、大人は面白く感じて子供の喜ばぬ物を以て、無理に興味を持たしめんとするが如き非教育的の弊を防ぐ事が出来る。此の如く精神的にも身體的にも兒童と成人とは著しく異つて居る。而かも教育は兒童を本位とせねばならぬゆゑ、兒童の本質を知ることが第一に必要である。併し兒童本位といふとも、子供の望むがまゝに勝手にさせて置くといふ意味ではない。之を誤解して子供をして我儘を恣に



せしむる事は甚だよくない。幾歳位の子供は如何なる方面に興味を有すかといふやうな事を研究し、之に基いて徳を磨き智を練るやうにせねばならぬ。また遊戯の裡に、自然に熱心、正直、柔順、協同一致等の美德を養ふやうにすることが肝要である。此の如く兒童の自然の發達を善導することを兒童本位といふのである。

## 第七章 兒童と人生

**保存性(營養と防禦)** 人性即ち人の本性は、兒童の時に既に備つてゐる。而して此處より人の善良なる性質は育つて來るのである。故に兒童の教育をするには、其本性を保護して、善良なるもの、萌芽を育成せねばならぬ。兒童に關する智識なくして漫然と結婚し漫然と人の父となり母となつた人は、兒童の日常遊戯の中に將來、尊い人性の現れてゐることに氣付かぬ。故に子供を我儘と罵り、うるさしと叱り、自己に都合の良きことのみ考へ、兒童の尊い性質を認めて之を善導することをせぬのは、甚だ危険である。抑々人には六種の大切な天性がある。勿論此中には他の動物の有つてゐるものもあるけれども、動物は唯本能として其等を有するに過ぎぬのであるが、人は合理的に道理を考へ其天性を完うするの働を有してゐる點に於て、動物とは、其趣を

異にしてゐる。

其等六種の第一は保存性である。これは他の動物にも存する性質であつて、自己の生命を保存しやうとすることである。換言すれば、他の侵害を防ぎ、自體を健全に永續せしめやうとする本性である。これが子供に在つては第一に營養本能として現れる。即ち子供は生れながらにして哺乳を知り、他の食物を食することを知つて居る。これは自己保存の最根本となるものである。斯る本性がある爲めに子供はよく物を食するのである。然るにそれを煩さいなどと妨げるのはよくない。適當に此本能を満足させてやらねばならぬ。二時間か三時間遊ぶと、子供は直ぐ歸つて、「何か下さい」といふ。それを「お前は先刻食べたばかりではないか」と、老人が自己の状態より判斷して拒絶するのはよくない。子供は代謝機能が盛んで早く空腹になるものである。殊に十三四歳は榮養本能の旺盛な時であるゆゑ、よく注意せねばならぬ。

保存性の他の一は防禦本能である。この本能は自己に危害を加へるものを防ぎ、或は逃げ、或は抵抗し、或は逆襲する等の作用をいふのである。これは幼時「人見知り」として現れる。この子は人見知りをしていけぬ」などというて親が客の前で面目を失するやうに思ふのは即ち此の現れである。それを人見知りせぬやうにと、俗間では羅巾で顔を拭いたりするが、それは詰らぬ迷信



である。人見知りとは天性の防禦本能から來てゐることで、吾人の祖先が、知らぬ人より受けた危害が重つて「見知らぬ人は危険である」といふことが一種の本能となり、それが今日にまで傳つて來てゐるのである。故に斯る本能の全く無いのは異常である。併し子供は初め人見知りしても度々経験を積んで來れば、初めての人に對しても平氣になるものである。それに、誰の前でも初めより平氣でゐる子供を、親達は得意がつてゐるが、それこそ却つて異常である。

以上營養本能及び防禦本能の二者、即ち保存性は、人の生存せる間常に存続するものである。子供は之を赤裸々に現はすゆゑ明瞭であるが、大人は是等の本能を調節する理性の働があるゆゑ、純粹の本能として、子供の如く率直には現はれぬ。此の如く其現れ方には相異があるけれども、人は長幼の別なく此本性が存在して居るのである。

**自由性**(遊戯と主張) 第二に人には自由性として、自己の思ふことを拘束なく現したいといふ天性がある。之は人に取りて極めて尊い働である。西洋では、昔、自由を得んが爲めに、多數の人命を賭して、政治的革命を企てたことが幾度もある。是は政治上の自由であるが、吾々人類に取つては、此他に人格其物の自由を有することが大切である。自らの自由を有すると同時に、他人の自由を妨げぬやうにすること、即ち互に人格を尊重することが必要である。自由は我儘とは

違ふ。人は自由の權を有する。自己も人である。親のいふことなど聽かなくともよい。などと考へるのは、我儘であつて自由ではない。其證據には、必ず其後に不自由が來る。我儘で道徳を守らぬことを自由と思つてゐると、其後には他人に見捨てられるといふ不自由が來る。法律に背いても亦同じである。その反對に、親の命に従ひ、道徳を守り、法律を遵守すれば、其時は窮屈に感じて、後には必ず大なる自由が來る。これこそ眞の自由である。故に法律、善良なる習慣、道徳は、眞に人を自由ならしめる所以であつて、決して不自由ならしめるものではない。兎に角自由は人生の主要素であつて、子供の時に既に現れてゐる。併し子供には道徳觀念などが無いので、本能に任せて我儘放縱になり易い。故に漫然と叱りつけずに、人の尊き自由性の萌芽として之を善き方面に發達させねばならぬ。これは子供のみならず、實際に人を取扱ふ上に最も大切である。

自由性は最も多く遊戯に現はれる。併し他より子供に遊戯を強ひたのでは、仕方なしにさせられるので、子供に取つては少しも面白くない。自然の儘に放任してこそ其處に始めて子供の自由が働いて、彼等は全力を注いで遊戯に熱中するのみならず、彼等の仲間自然に規則を作つてゆく。これ即ち人の法に従ふ心の出來る基である。人類に於ける法に對する服従心の發生する起源



は斯る所にも存する。勿論法律其物の發達は少しく異つてゐるけれども、之に對する服従心は遊戯に於て認められる。即ち子供は遊戯の際、遊戯の規則に背いて我儘をすると、其遊びに故障が生じて却つて面白くなくなる。併し之に従ふときは、非常に面白い。即ち自由を十分に發揮することが出来る。故に自然に法に對する服従心を養成するのである。遊戯は兒童に對して普通の人の考へてゐる以上に大切なものである。彼等は遊戯の裡に品性を形造る。故に兒童の遊戯は努めて之を獎勵すると共に、適當の指導を與へねばならぬ。

次に自由性はまた自己主張として現はれる。子供は、一人が「何處かに遊びにゆかう、何處がよからう」といふと、他の一人が「何處にゆきたい」と其希望を述べる。字を書くに「筆がよいか、鉛筆がよいか」といふと、「筆がよい」或は「鉛筆がよい」と答へる。これはつまり自分の欲する所を主張せんとする自由性の現はれである。若し此主張を彼等のいふが儘にして居れば、終に彼等は我儘になる。また一々兒童の主張を否定して、父兄の意見に従はせやうとすれば彼等は盛に反抗する。さもなければ獨立心に乏しくぐすくになつてしまふ。故に此等の點は教育上非常に注意すべきことで、若し彼等の主張にして正當であれば、「お父さんはかう考へるけれども、お前の言ふやうにしてみやう」といふやうに、それを通してやるがよい。若しまた不當であつた

ら嚴として之を斥け、其不心得を諭さねばならぬ。それを正當の主張まで斥けてしまふと、議會に出て、自己の定見さへ無く、縱令それがあつても主張することの出来ぬやうな人を造り上げる。故に彼等の正しい自由性は之を正當に導いてゆかねばならぬ。實に子供の遊戯の裡に、既に彼等が將來帝國の議政壇上に立つて、國家の爲めに正しい意見を主張すべき強い力が、芽ぐんでゐるのである。

**充實性(好奇と獲得)** 第三に人には充實性がある。人は保存性即ち食物を攝取し、危害を除いて、生命を保持するのみでは満足せぬ。其上に自由性に依つて自己を主張する。併しそれだけでは未だ十分に満足せぬ。更に毎日の生活の裡に種々の經驗を取り入れて、内容を充たしゆく所の性質がある。是れ即ち充實性である。然らば子供は何を充たしてゆくかといふに、種々の事物を感覺に觸れしめその精神内容を充たしてゆくのである。それと共に自己の所有物を増してゆく。前者は好奇心に依り、後者は獲得本能に依つて行はれる。好奇心は子供の二三歳の頃より既に現する。而して學齡を通じて十五六歳の頃までは、殊にこれが盛に活動して、珍奇なる物、不思議なる事に接すると、見たがつたり、聞きたがつたり、持つたり叩いたりして其對象を珍らしがる。



學校兒童は、樂隊でも通ると、教場にゐても夢中で其方へ心を注ぐ。是れ皆好奇心の働である。故に好奇心は知識増加の本能であつて、これが衰微すると知識の受容力も亦衰へるのである。老人になるに従つて新知識に乏しくなるのは、種々の原因もあらうが、好奇心の衰微も亦其最大なる一因である。老人は誰かの講演があるなどいふ場合に「何度聴いても同じことである。それより家に寝てゐる方がよい」といふやうに、好奇心が甚だ弱くなつて来る。随つて知識も進歩せぬのである。元來人が不可思議の對象に依つて起す所の驚異の念は、哲學の起源となるものであつて、子供の時より既にそれが現はれてゐる。故に斯る尊貴なる兒童の好奇心は、之を鄭重に取り扱ひ差支へなき限り其満足を計つてやらねばならぬ。

獲得本能とは、子供が何でも自分の所有物にしやうとする性質であつて、好奇心が主として精神的内容を充實させてゆくに對して、これは物質的充實を計るものである。獲得本能は、早く既に兒童の二歳乃至四歳頃に現はれ、妹の物を持出したたり、兄の物を欲しがたりする。之が悪く働くと窃盜本能を助けて、他人の物を盗むやうになるが、善く働くと、財産を積み勤儉貯蓄をするやうになる。人にはまた藏書癖、骨董癖などがあるが、是等は皆獲得本能の發現である、獲得本能の最旺盛なるは十歳より十二三歳頃までである。故に其頃は窃盜などをし易いのである。幼

時に兄妹などの物を持出すのは、他人の物といふ觀念が無いか又はそれが乏しい爲である。然るに此頃に至りては意識的に窃盜をするのであるゆゑ、十分注意せねばならぬ。

如何に充分なる生活をする子供にも此本能は現れるが、或る時期に至れば自然に適當の制裁が出来るのが常である。併し中には性來悪い心を有つて生れて来る者もあるが、それは極めて少い著者の知れる或る家庭に、尋常三年になる子供があつたが、其子供の通ふ學校でよく物が失くなる。段々取調べた結果、其子供が盗むのであるといふことが分つた。そこで親に其旨を注意したところ、親は驚いて、其子供の部屋を調べて見たら、天井裏に穴を穿けて、其處に山の如く鉛筆墨筆などを蒐集して居た。此等は其品物を何にしやうとの目的があるのでもなく。唯蒐めたいから集めるのである。是は病的の蒐集及び獲得本能であつて、終にはそれが窃盜癖になるのである。されば獲得本能は、勤儉貯蓄の美風ともなり、或は窃盜の惡癖ともなるのであるゆゑ、よく注意して導かねばならぬ。

**擴張性**（權勢と同化）擴張性とは自己を擴げてゆかうとする性質である。自己を擴げるとは、自己の意志の欲するがまゝに人を左右し、自己の意志を擴張しやうと欲する性質である。斯る性質は何人も有すること、權勢慾と呼んでゐる。政治家、軍人などに於ては之が殊に強い。



而して自己の提出した法律が國內に行はれ、自己の命令が全軍に實行されるのが非常に愉快である爲め、愈々彼等の權勢慾を強める。

併し政治家又は軍人にあらずとも、誰にも此擴張性はあるので、自己と同じ主義の人を造り自己と趣味の人を一人でも殖すことが出来る、非常に愉快を感じる。此の如く他人をして自己と同じ考を持たしめ、自己と同じ趣味を持たしめやうと欲するのを同化といふ。權勢と同化とは、即ち人類の擴張性を成すものである。人類には同化慾があるゆゑ、自己の好きなことを他人も亦好きであるといへば、非常に悦ぶのである。甚しきは、自己と同じ病氣を他の人も有つてゐて「私も其病氣で困つて居ります」などいふと、他人の病氣を喜ぶのはよいことでないとは知りながら、何となく味方の殖るやうに悦ぶものである。子供も亦己と同じ遊びをする者を悦び、他人を勧めて、それに同意せしめ若し承知せぬ時は争闘することさへある。つまり他人が自己と同一になることを悦ぶのである。

すべて何事に由らず、人は自己の嗜好に他人を勧誘する傾がある。茶漬が好きな者は、他人にもそれを勧める。著者が幼少の頃、祖母が自己の好きな爲めにいつも茶漬を勧められて困つた事がある。斯様な同化慾が高尚なる方面に働くと、道を説いて人を其の道に進め、教を廣め

て人を信仰に導かうとするやうになる。この大切な同化作用は實に子供の時に既に其萌芽を現はすのである。殊に權勢慾の最も旺盛に現はれた子供は所謂餓鬼大將であつて他人を自己の配下に置く。この同化權勢が廣く世の中に及べば、救世の大事業ともなるのである。釋迦、孔子、基督の如きは、天下萬民をよく同化し、よく其欲する所に彼等を従はしめたのである。かゝる偉大なる力の根柢が子供の生活に萌すのであると思へば、兒童教育の一日も忽にすべからざること

が深く感ぜられる。

**向上性(欲望と理想)** 向上性は、人類に特有の性質であつて、動物には之を認めることが出来ぬ。人類は常に一層善くならうと上に向つて進むことを望んでゐる。人にこの向上性のあることは、非常に尊いことであつて、生後僅かに四十年か五十年かの間に、全く生れ變つたやうに進むのは、人類以外の他の動物には認められぬ所である。犬猫などは、一二歳の子と、十數年も経つた親との間に大して變つた所はない。然るに人間に於ては、三歳の子供と二十五歳の青年とは、全く變つてゐる。これは人に大なる向上性がある故である。子供には、この性が欲望として現はれる。古來欲望は悪いものと思惟されてゐた。今日とても勿論悪い欲は之を抑えねばならぬが、欲望其物は決して悪いものではない。世の中は、之があるが爲めに進歩もすれば發展もするのであ



る。

故に欲望を適當に制御することは必要であるけれども、絶對に之を斷滅させることは出来ぬ。子供は種々の物を欲しがり、何かやると「これは嫌や、姉さんの持つてゐるやうなもつと綺麗なものを頂戴」などといふ。それを我儘とか慾張りとか叱るけれども、個人及び社會を向上せしむる所の知識慾も、秩序慾も、皆斯る欲望に發するのである。我が西隣國は目下非常に亂れてゐる。併しその國人として決して世の亂れるのを好んでゐる譯ではあるまい。誰も皆國の秩序を立てたいとの欲望を有してゐるに違ひない。我國に於ても警察を置き軍隊を備へて、國家の安寧を期してゐるが、これ皆秩序欲の結果である。斯る欲望は個人に於ても子供の時より現はれてゐる。故に之を善導せねばならぬ。

欲望は十五六歳以上になると醇化せられて理想となる。理想とは、想像の極めて圓滿完全なるものであつて、今の状態に満足せず、更に心中に描いた所のより良い状態に進まうと欲する目標である。例へば、婦人が昔の賢婦人の傳を讀んで、「自分もあのやうな人となつて、人の爲め、社會の爲めに盡したい」と考へ、其人を模範として之に接近してゆくとすれば、その賢婦人がその婦人の理想である。普通の人に於ては、青年期に至れば理想は必ず出現する。若し此理想がな

れば、其人の生活には未來が無いと謂つてもよい。個人に理想が無ければ、其國家にも理想がないことになる。

今我國前途の憂は國民的理想のないことである。先覺者は後進を誘導することなく、一般人々は唯眼前の事に汲々として居て、世界に於ける日本の天職は何かと考へる人が乏しいことは心配である。青年にして理想なく、國家にして國民的理想を有せぬのは、耻辱であると共に前途甚だ危険である。理想の有る人と無い人とは、食事と同じやうに食べ、寝起きも同じやうにする。けれども、理想ある人の心の奥底には、「自己今日の修養程度では足らぬ。もつと修養を積まねばならぬ。國家の爲め人類の爲に盡さねばならぬ。其爲にはまだ智徳の練磨が足らぬ」と思つて自ら奮勵する故、必ず向上進歩して、理想なき人との差異が生じて来る。

上述の如く欲望と理想とは、人類向上性の現れであつて、青年期後に現れる高い理想も、其萌芽既に子供の時に生じてゐるのである。即ち子供は、「早く兄さんや姉さんのやうになりたい。そうすれば棚の上のお菓子も自由に取れる」などと、子供らしい欲望を有つてゐる。其中には、「自分分は小さくて弱い。それで大きくて強い所の兄や姉のやうになりたい」との望を含んでゐるのである。斯る欲望は、成人が痛切に感ずる所の「自己を釋迦、孔子、基督などいふ聖人に比べると



同じく人でありながら遙かに劣つてゐる。自己も向上せねばならぬ」との心を起すと同じである。唯だ後の場合は、其背景即ち理想を抱いてゐる人の心が發達してゐる爲め高尚なのである。故に子供の子供らしい理想欲望は、之を一場の笑話とすることなく、よく之を導き、子供の頭腦に高尚なる理想を刻みつけねばならぬ。人として醉生夢死に世を終る程價値の無いものはない。如何に多くの財産を有し奢侈贅澤に暮す人でも、國家のため世界のためなどいふことを考へることとは一度もなく、唯自己の欲望の満足にのみ焦る者は豚の生活と何等選ぶ所はない。人間の向上性は適當に行はるれば甚だ尊いものであるけれども、卑しい方面に向ふと名利の奴隷に陥る處がある。されば幼時より子供の向上性の善導を怠つてはならぬ。

**延長性(宗教と性慾)** 延長性とは、人がその生命を延したいとする本性を有するをいふのである。人は死後も尙ほ自己を存続しやうとする。人には誰も斯る性質を有して居るのであるけれども、明瞭に現はれる人と、比較的不明瞭な人とがある。併し自己の永遠の存続を望むのが人の常である。若し誰にでも「あなたの人格の遺るのがよいか、消滅してしまふのがよいか」と問うたなら、健全なる精神を有する人である限り、誰も前者を欲するであらう。これ人に延長性のある證據である。この性は兒童期に於て宗教心として現はれる。宗教は必ず未來を説く。地獄極樂は

全く譬である。けれども元來人は不滅である。それに就いて昔より靈魂不滅と稱へ靈魂に就ては一種迷信的の考が世に行はれてゐる。

昔の人は人の魂を以て火の如きものと思つてゐた。併し科學的に解釋すれば、靈魂は人格である。此世の中に於て働いて置いたことは、縱令其人の肉體が滅しても、千萬世の後までも人生のあらん限り遺つてゆく。即ち其人の生前に人格の光に依つて照して置いた仕事は、死後永遠に残る。これ即ち靈魂の不滅なる所以である。此點を捉へて宗教は人に永遠の満足を與へやうとする。然るに恰も好し人には延長性がある爲めに宗教を信じ無限の生命を得やうとするのである。子供に於ては普通十二歳乃至二十歳の間宗教心が起つて来る。即ち神佛の觀念に依つて無形の絶對を拜むやうになる。人には宗教心があるゆゑ、其生命は短くとも、靈魂即ち人格は永遠に遺存することを信じて安心する事が出来るのである。

次に延長性は性慾として現はれる。性慾即ち男女の慾は、自己を子供に托して永遠ならしめやうとする延長性の現はれである。これは今日の科學より觀ても、子供は明かに親の心身を繼承するものであつて、父母の心身は共に子供に傳へられるのである。されば自己の子孫が血統を續けてゐる限りは、自己の生命を續けてゐる譯である。自己一人の肉體は滅びても、其一部は子供に



傳つてゐる。かういふ自然の妙用より性慾は生じて居るのである。而して性慾は、青年期の初より自然に本能として現はれる。これが醇化されると戀愛となり、更に藝術や宗教の衝動ともなるのである。

上述の如く、人には動物と異なる所の向上性、延長性、自由性などの諸性質があり、また動物にも多少存する所の保存性、充實性、擴張性などを有してゐる。而して是等は皆子供の無心の遊び、或はいたづらの裡に現はれるのである。故に子供を育てることは、一面より見れば頗る微妙なる仕事である。犬が其子を哺育するが如く、本能的に自己の子供を育てるのみの人間は、親としての資格の無いものである。故に日常よく子供に就いて研究し、なるほど子供はかくして發達するのであるか、之が子供の天性である、將來立派に伸長せしむべき性分である。と云ふことを極めて子供の教育を施さねばならぬ。支那の古典「大學」にある明德とは、即ち子供の時より自然に有する斯る美しい性情を指すのである。而してそれは父母の懐に抱かれてゐる時より、自然に養はれるのである。之を思へば、子供の教育の一刻も忽にすべからざることが益々明であらう。併し子供の教育は、其天性を知るのみでは十分に出来るものでない。其年齢に應じて、手段方法を講ぜねばならぬ。

### 第九講 兒童 (三)

#### 第八章 胎教

子供の教育の最根柢となるものは、昔より稱へられてゐる所の胎教である。胎教の效果に就ては今日種々の議論があつて、中には、胎兒は外部より來る精神的影響、即ち教育的影響を受けるものではないと否定する學者もある。併し種々の事實を綜合してみると、今日の科學より觀ても胎教は矢張甚だ大切なることであつて、妊娠中の母の心身の如何は、胎兒將來の發育に密接の關係を有する。胎教を説くには、先づ遺傳に就て説明せねばならぬ。これは前に祖先の條下に於ても多少述べて置いたが、吾人の心身は、皆祖先よりの遺傳を受けてゐるものであつて、父系及び母系の兩遺傳が集つて吾人の心身を形成して居るのである。故に胎教に先つて、結婚の當初によく双方の血統を調べねばならぬ。單に家系地位等の表面の事や若くは單に本人さへ良ければよいといふに止まらず、其父祖の如何をも調査せねばならぬ。即ち消極的に對手方の血統に、低能、神經並に精神病者、遺傳性の惡疾、犯罪者等の有無を調査し、積極的に善良なる人物の多く出た



家系を選ぶべきである。然る時は、遺傳上より觀て、其子孫に善良なる人物の出ることは、疑ふ可らざる事實である。

されば今日に於ては優生學即ちユージエニツクス (Eugenics) に基いて、悪しき子供を産出したる後に心配するよりも、先づ優良なる子孫を造るやうにと努むるに至つた。更に進歩した國に於ては、既に國家が干渉して、優良なる種族を造らうと努力してゐる程である。故に個人に於ても、結婚に當つては、よく對手の過去現在に涉つて其血統を調査し、優良なる家系を選択せねばならぬ。若し一旦不幸にして異常兒を生出したら、其子供の境遇を良くして、後天的に出来るだけ救濟せねばならぬ。さて優生學の教ふる所に從つて完全なる結婚をなし、更に子供が胎内に宿つたならば、努めて母體の營養を佳良にし、殊に精神感動、即ち甚だしい悲哀、憤怒、憂慮などを避けねばならぬ。何となれば是等は皆胎兒に悪影響を及ぼす爲めである。母の精神感動は、直接に胎兒の精神には影響せぬがそれが母體に影響するのはいふ迄も無い。さすれば更にそれが胎兒の身體に影響し、轉じて其精神に打撃を與へるのである。今日の學說に於ては、昔の二元論の如くに身體と精神とを別物と看做さず、兩者の間には不可分の密接の關係あるものとして居るのであつて、身體の事情は直ちに精神に影響する。

抑々妊娠せる婦人は身體は一であつても、其中に、母に屬する部分と、子供に屬する部分とがある。また兩者ともに、身體に關する方面と精神に關する方面とがある。然るに兩者の間には密接の連絡があつて、母の精神上に何等かの苦惱があれば、先づ母の身體に種々の變化を生じ、それが胎兒の身體に影響して其營養を悪くする。かくして胎兒は自己身體の故障より延いて精神上に種々の悪影響を受ける、故に昔時考へられて居たる如くに、母の精神的感動が直ちに胎兒の精神に影響するのではない。其間に身體が介在してゐるのである。此の如く母體と胎兒との間の精神的關係は、身體を介して間接的ではあるけれども、兎に角其間に關係があるゆゑ、妊婦は其境遇を良くし、精神的感動を避け、營養を佳良にし、特別に變つた生活をする必要はないが、さりとて、安逸に流れぬやうにして、平生の如く働かねばならぬ。母體の胎兒に及ぼす影響は、實に恐るべきものである故、胎教は甚だ大切なことである。

## 第九章 嬰兒の精神

嬰兒期即ち出生より三年に至るまでの間の子供の精神の發達は、大學三年間に於て覺えるよりも、更に多くを覺えると言はれてゐるが、全く其通りで、此三年間に於て、精神活動の基礎が



來るのである。世間には早教育を主張する者があるが、之は頗る注意すべきことである。勿論子供に早くより實物を直観させたり、種々の有益なる経験をさせることは必要であるけれども、早くより漫りに算術、讀書などの學科を詰込むのは有害無益である。兎に角嬰兒期は精神活動の基礎の出来る時であるゆゑ、深く注意して教育せねばならぬ。それには兒童の精神の發達する状態を知らねばならぬ。

先づ此時期には感覺が大に働く。五官、殊に見聞とて視覺、聽覺が大に働いて、精神内容を増してゆく。故に此等感官を保護すると共に、種々の色彩ある物、禽獸蟲魚花卉の如き自然物などに接せしめて、十分に感覺の發達を圖らねばならぬ。また耳には、或一種の音のみを聴かせずに鐘、笛、オルガン、ピアノ、ヴァイオリン、其他あらゆる調音を聴かしめねばならぬ。これは子供を自然の儘に放任して置いても發達はするが、同じ遊ばせながらも、特に感覺の練習に注意をしてやると、耳目聰明の子供を養成することが出来る。すべて感覺を十分に養つて置かねば、精神作用の根柢が立たぬ。就中、視覺と聽覺とは、精神發達の根本を成すものである。次に觸覺や筋覺を練るには、物を持たせ、特に玩具を興ふることが必要である。子供に物を持せぬやうにすると、觸覺、筋覺などが發達せぬ故、外物に就ての確實の知識を得ることが出来ぬ。玩具でも唯

遠くより眺めたり飾つて置くのでは價值が少くない。種々に玩ばれるものでなくてはならぬ。幼稚園の保育方法として伊太利のモンテッソリー女史の考へたものは、此等諸感覺特に觸覺、筋覺の練習に重きを置いたものである。要するに感覺の練習は極めて必要であつて、特に視覺、聽覺及び觸覺は知識獲得の根本を成すものである。

次に嬰兒の感情であるが、感情は快苦の表出として早くより現はれる。特に苦痛の情が早く現はれ、愉快の情の表出はそれよりも後れて現はれる。即ち快感の表出は、笑として、生後四五日にして現はれる。然らば苦痛の表出は何故快感のそれよりも早く現はれるかといふに、苦しいことは人に對して危険を意味してゐる。隨つて之を知らせて他の救を求めらる必要がある。故に快感の表出よりも早く現はれるのである。子供は言葉の出来ぬ間は、寒い時にも身體の工合の悪い時にも、痛い時にも、氣に入らぬ時にも、直ぐに泣くのである。故に子供の泣く時にはよく注意して之を辨別せねばならぬ。快感の表出は苦痛のその如く、人體に危害の迫つて居ることを意味するものではない。故に遅く現はれる。併し快感の表出は、同情、愛情の發生に大なる關係のあるものであつて、笑ふ間に他人と同情を交換し得るのである。

憤怒及び恐怖も亦、自己保存に必要なものである。恐怖は消極的に自己を保護する所以のもの



であつて、嬰兒は早く既に親熟せぬ事物に遭ふと恐怖を感じる。併し、嬰兒は親熟せぬ事物が眞に怖るべきか否かを經驗せぬ。但し、人類の祖先が、親熟せぬ事物より危害を受けた經驗に依つて、其等の對象に恐怖を感じたのが、次第に本能として遺傳してゐる。それ故に嬰兒は先天的に奇異の事物に恐怖を懐くのである。世にはまた後天的の經驗に依つて恐るゝに足らぬ物を怖れる人がある。例へば芋蟲を見て慄え上り、蛇を見て眞蒼になる人がある。此等は、別に危害を加へぬまでも、始めて不圖芋蟲などを握つて、其色彩や形態、奇怪に動く様などを見て、一種名狀すべからざる不快感を頭に印象して居る爲に、一見しただけで直ちに慄え上るやうになるのである。其他鼠の嫌いな人、猫を怖れる人などもある。此の如く一寸した經驗より生涯非常に恐怖し易くなることがある故、子供を取り扱ふにはよく注意して、急に吃驚させるやうなことがあつてはならぬ。

嘗て徳島縣に於て、十三歳になる一兒童か、叢間に於て蛇を踏み非常に驚いて、家に歸るや性格忽ち一變し、今まで快活であつた者が急に沈鬱となり、一人で學校にも行けなくなつた。此の如く急激なる恐怖は恐るべきものであるゆゑ、子供を急に驚かせることの無いやうにせねばならぬ。憤怒も亦幼時より現はれて、大人のその如き表出をなすことがある。この情が次第に發達す

るに従ひ、癩癩持になつたり喧嘩をよくするやうになつたりする。併しこれが善い方面に向くと國家社會に對する公憤などとなる。神經質又は筋肉の十分に發達せぬ子供は、少しのことにも激怒する。故に斯る子供には、成るべく刺戟を與へぬやうにせねばならぬ。斯る子供の易激性は、長じて後神經質や癩癩家とならしめる處がある故、漫りに激怒せしめぬやうに注意すべきである。

嬰兒期三年の間には、運動が次第に巧妙になつて、歩行、跳躍、攀登などの事が出来るやうになる。我國の子供は平均生後一年一箇月にして歩き始める。併し早いのは十箇月位より歩き出すが遅いのは二年乃至二年半までも歩けず、時としては、五年までも歩行の出来ぬ者もある。此等は、其出生季節の寒暑、個人の性質等に依つて區々であるが、常態としては一年乃至一年半までに歩けるやうになる。元來運動といふことは、子供の心身の發育上に極めて重大の關係があるので、運動が早く發達し且つ又巧妙であれば、其精神の發達が早く、且つ優れてゐる。故に子供の運動状態に依つて、其子の精神發育程度の如何を知ることが出来る。

子供はまた嬰兒期より次第に言語を獲得するものであるが、其發達には一定の順序があつて、初めは「アイウエオ」の母音を發音することが出来るやうになる。嬰兒の泣聲は此等各個の音の



連続である。次には「マババ」等の音を發し得るやうになり、「マンマ」「バツバ」などと發音する。次には此等の音に更に母音が加はつて、「アバ」「アブ」などいふやうになる。之を喃語と呼ぶのである。早き者は生後六七箇月より發音を始めて、一年の終頃に至れば喃語を發するやうになる。之と殆んど同様に種々の音を眞似た言語、即ち擬似語が現はれて来る。例へば「ニャーノー」「ワン〜」「チュ〜」の如きである。即ち同一語を重複して發音するやうになる。斯る擬似語は、世界各國共通のものであつて、互に音が似てゐるので容易に理解することが出来る。例へば我國の「ワン〜」は、佛國では「ウオン〜」といふの類である。

之に次いで發達して来るのは單語である。生後滿一年に達すれば、少くとも二三の單語は覺える。例へば「ニャ〜」と言はずして「ネコ」といひ「ワン〜」と言はずして「イヌ」と言ふの類である。發音の比較的早い子供は十二三語も覺えることがある。斯く通常二年頃までには普通の單語を覺える。單語が現はれると次で單句が話せるやうになる。例へば「花を折つて下さい」といふ代りに「花取つて」などといふ。是に於て名詞と動詞とが結合して一の單句となる。かくて滿三年までに一通りの國語を覺える。こゝに一通りと謂ふのは、彼等に不自由のない程度といふ意味である。以上は言語發達の順序である。而して最初に子供に現はれる所の母音から成

つた語を情調語といふ。之は感情的に自然に出て来るのである。例へば吃驚した時に「オツ」又は「アツ」といひ、苦しい時又は嘆息する時に「アム」といふの類は、世界各國共通のものである。言語の發達は、子供が社會的に交渉してゆく上に最も大切のことである。上述の如く、生後三年までの嬰兒期の間には、感覺が發達し、主として自己の保存に大切な感情が現はれ、運動が出来るやうになり、且つ一通りの言語を習得する。故に茲に始めて幼稚園に送つてもよいやうになるのである。

## 第十章 幼兒の精神

幼兒期に入ると、好奇心が盛に發動する。これは一に感覺飢餓と稱して、感覺的に餓えてゐるので、種々の物を持つたり、味つたり、嗅いだりすることが盛になる。斯る好奇心の強盛は、感覺をしてよく發達を遂げしめて、精神發達の根柢を造る。恰も家を建てるに、先づ敷地を固めるやうなものである。此時期の子供は非常に疲勞し易い。故に物に倦いて轉々注意を他物へと移してゆく。随つて好奇心が益々活潑に働くことになる。故にこの天性を利用し、努めて知識の啓發を圖らねばならぬ。随つて幼稚園時代の子供は、鳥獸蟲魚草木等の自然物に接觸せしめて、其好



奇心に満足を與へ感覺を養はしむ可きである。併し種々複雑なる人工物のみを與へては、却つて子供の精神を亂す虞があるゆゑ、なるべく自然物に接觸させるがよい。

若し感覺飢餓に満足を與へることが出来ねば、子供の好奇心は萎靡して、すべての事物に對して興味を有せぬやうになる。諺に「貧すれば鈍する」といふことがあるが、實にこの諺の如く、貧しい家の子供は好奇心に乏しく、珍しき物や、美しき物を見せても、それ程喜ばぬ。併し中流以上にして心身に異常のない子供は、好奇心が盛に起るを常とする。營養不足にして飢餓を感じて居る子供は、心が其方に奪れてゐる爲め、他の物事に興味を起し難い。故に貧兒や孤兒を教育するには、先づ營養を十分に與へねばならぬ。好奇心は、上述の如く精神の發達に極めて重要なものではあるが、餘りに其度が過ぎて、注意が物より物へと移り、暫しも落付くことなく、移つて止まぬものは、病的である。故に此點は教育に當り、十分注意せねばならぬ。

又此時期には把持本能とて、物を持つてみたがる本能が現れる。前にも述べた如くに、物を持つことは、筋覺や觸覺を發達させて、確實なる知識の基礎を造るものであるゆゑ、玩具を與へて此本能の満足を圖るべきである。然るに子供の物を弄ぶのを叱るは、教育を解せぬ者のすることである。玩具を與へるのには子供が自由に玩んで差支へない種類のものを選ぶべきである。然る

に社會が贅澤になるに隨ひ、子供の玩具にも千圓二千圓の大金を費して買ひ與へる。そうしてこれは大事な玩具を保持してはいけぬ」と、唯飾つて置かせる者もある。これは大なる誤りである。玩具の價値は子供が自由に遊ぶ所に存するのである。玩具とは即ち持て遊ぶ道具といふ意味であるゆゑ、之を飾つて置くのみでは殆んど玩具の用をなさぬ。把持本能は智識發達の一段となるものであるゆゑ、成るべく物を持たせるがよい。併し持つてよいものと、よくないものとを幼時より區別させねばならぬ。かくすればそれが習慣となつて、父母の物と自分の物とを區別するやうになる。上流の家庭に於ては、保姆などが機嫌を取つて氣儘をさせる故、子供が我儘になる。そこで止むを得ずして他家に預ける。其結果は親子の愛情が疎くなる。故に日頃かゝる事の無きやう。家庭に於て子供の本能に満足を與へると共に、其間に訓練制裁を設けることが必要である。

模倣本能も、此時期に強く現れる。模倣は、生後半年頃より現はれて、一年二年と次第に進み三年乃至七年に於て最も盛である。模倣は、子供が次第に社會的となり、他人を了解する上に頗る大切なことであつて、人の生活は大抵模倣に由つて成り立つて居る。衣服の着方、言葉の使い方、食事の仕方等、すべて他の模倣である。抑も眞似るとは「マネブ」といふことで、即ち轉じ



て學ぶの意である。故に此本能の教育的利用は、極めて大切である。然るに此に一の困難は、兒童の環境は必ずしも彼等の眞似てよいことのみではない。尤も眞似て悪いことの中に、子供の用ゐる下等の言葉づかひなどを入れて、非常にそれを心配してゐる親達もあるけれども、かゝることは大した問題ではない。固より上品の言葉を使ふに越したことはないけれども、一時彼等が下等の言葉を使つたとて、子供が年とつて位地ある人と交れば、自然にそれは改つて来る。子供に眞似られて最も困ることは、行爲上の惡癖である。書生が煙草を喫んで見せると、子供は直ぐ眞似する。それも親か保姆が居れば叱つて止めさせるけれども、書生などは面白半分に見せると、すると子供は初め眩暈がするとか辛いとか云うて居るけれども、後には習慣になつて平氣で喫むやうになる。其他、飲酒、虚言などを眞似るのも甚だ恐るべきことである。孟母三遷の教も子供の悪い方面の模倣を恐れた爲めである。成人に至れば善惡を區別して、容易に人の惡行爲を眞似るやうなことがないゆゑ、少し位環境が悪くとも虞るゝことは無いが、子供は善惡ともに眞似るゆゑ、善良のこのみを見聞させるやうにせねばならぬ。飲酒喫煙に限らず、凡て子供に惡影響を與へるやうな境遇を避けしめると共に、善良なる模範を示さねばならぬ。

又この頃の子供には表象聯合作用が盛んに行はれるやうになる。聯合作用とは、個々の表象を

互に聯合させる所の精神作用である。例へば、物と物との色とか形とかが似てゐると、其間に何等本質的關係は無くとも、其等の類似點を結びつけて、一方に依つて他の一方を想出すやうになる。此の時期の子供には、特に斯る觀念聯合が旺盛である。而して聯合作用には、接近聯合と類似聯合との二種がある。前者は甲と乙との場所、又は時間上の關係に依つて出来るもので、後者は、甲と乙との形態、大小、性質等の類似に依つて出来るものである。例へば、子供を抱いて寝かす習慣をつけて置くと、「抱く」と「寝る」との間に聯合が出来て、若しその子を一人で寝させると、どうしても泣いて寝付かぬ。それを親は「悪い癖がついた」などいふが、それは寧ろ子供の方が癖をつけられたのである。これは接近聯合の例である。

元來子供の聯合作用は、甚だ面白いものである。或る日四歳になる男兒が、夢中で遊んでゐたが、其時丁度午砲の音が聞えた。すると「ドンが鳴つた」と、急に家に入り、自分で膳を出して食事を求めた。これは、「ドン」といふ音と、食事することゝが聯合してゐる爲めで、また接近聯合の例である。吾人の生活の大部分は聯合であつて、何をした後には何と、順を逐うて想ひ出し實行するのが普通である。子供が物の名などを覚えるのは接近聯合に依ることが多い。例へば、火鉢を覚えるには「火鉢」といふ言葉と、「火鉢」といふ物とが聯合するゆゑ、「火鉢」と言へ



ば直ぐに其物の觀念が頭に浮ぶのである。これに就て面白い實例がある。それは三歳になる女の兒であるが、姉に伴はれて買物に洋傘屋へ行つたが、家に歸ると、洋傘のことを「ロハニ」と言つた。段々調べてみると、傘屋で番頭が小僧に命じて、「ロハニを取つて來い」と、値段の符徴を言つた。それを聞いたので此子は「ロハニは洋傘の事である」と考へてしまつたのである。

類似聯合に就いても面白い例がある。四歳になる男兒が、毎日朝食に鶏卵の半熟を破つて食べさせられるので、眞中に黄味があり、周縁に白味のあることをよく頭に印象してゐた。そこで一夜外出して満月を眺めたところが、月の周圍に暈のあるのを見出して、「半熟がある」と叫んだ。子供が時々大人を驚かすやうなことを言ふのは、大概類似聯合の結果であつて、これが次第に進むと、後に大發明をするやうにもなる。故に斯ることがあつた時に、親は笑ひごとくせず、獎勵してやらねばならぬ。ブラオンが蜘蛛の巢を見て、吊橋の構造を思ひ付いたのは、全く類似聯合の結果である。

此時期にはまた歌謠本能が現はれて、盛に歌を誦ふ。文句などはよく解らずに先づ譜を覺える。それで鐵道唱歌の流行する頃には、其譜を覺えてゐて「お母さんお菓子を頂戴よう」などと、節をつけて歌つたものがある。幼稚園では此本能を利用して唱歌を教へるのである。唱歌は、子供

の此本能を満足させるのみならず、肺の練習にもなり、また歌に由つて、種々のことを覺え趣味の修養にもなる。故に唱歌は教育上大切なものである。又此時期に注意すべきことは、歌謠本能が盛である爲に、種々の卑しい歌を覺える虞があるゆゑ、斯る種類のものに接せしめぬやうにすべきことである。元來歌謠本能は人類に限らず、動物に於ても有して居るもので、鳥や蟲の誦ふのは即ちそれである。

此時期に始めて生涯に亘つて消えぬやうな印象を残す所の記憶作用が發現する。但し其記憶力は全般に亘つて働くのではなく、或る強烈の刺激を生涯保持するのである。幼時の記憶を追懐してもわかるが、最初の記憶は先づ五歳位より始まり、それより以前の事は頭に残らぬのを常とする、而して此時期に印象された強烈の記憶は、感情に強い刺激を與へたもの、特に悲哀、苦痛、恐怖等、すべて消極的感情に關係あるものが多い。喜悅の方面は却つて強い記憶とはならぬ。然るに世には此時期の子供を幼稚園に入れて、將來に有益なる知識を得しめやうと考へる者もあるが、それは非常な誤りである。幼稚園の目的とする所は、兒童をして悪しき境遇に遠ざかり、善き習慣を得しめるにある。知識は到底、此時期に適當に得らるゝものではない。假令多少の知識を得たとしても記憶に留らぬ。六七歳の頃に盲目になつた者は、生涯物の形や色を想ひ浮べる



ことは出来ぬ。是即ち此頃の記憶の部分的にして而も薄弱なる證據である。若しも十五六歳以後に盲目になつた者ならば、形も色もよく記憶して居て夢には何時も之を見るのである。要するに此期の記憶は、薄弱であつて、感情に強烈の刺戟を興へた少數の物の外生涯頭に残つてゐることはない。故に幼稚園の頃漫りに語記を強ひてはならぬ。

又此時期は空想期と謂はれる程に想像作用が盛である。併し其空想は青年期のものに比して自然的であり断片的である、随つて頗る奇抜のものがある。例へば、茶漬飲の中にらつきようを入れて食する時に「坊さんがお湯を使つてゐる」というた者がある。これはらつきようの形と坊子頭との類似點を結びつけて、湯を使つてゐるなどと想像したのである。此の如く自ら如何に想像しやうなどと思はずとも自然に浮んで來るのを、自發的といふのである。子供が天才に似てゐるのは此故である。天才は努めずして自發的に想像の生産する人である。

此の如く自發的空想が盛である故、此時期の子供は、童話を歡ぶ。童話は即ち空想的產物である。故によく此時期の子供の心理と合致する 桃太郎の話やカチ／＼山の話に於ては、何時の頃何處であつたかは、問ふ必要はない。子供は唯話のすぢを辿つて想像を描き樂むのである。故に童話は、時代、場所、數、固有名詞等が頗る曖昧である。桃太郎が鬼ヶ島を征伐するのに、雉を

一羽伴れて行つたり猿や犬を一疋連れて行つても仕方がない。何れ何百羽とか何千疋とかを要するのであらうが、その様な數には少しも頓着ない。唯桃太郎が、雉子猿犬を伴れて往つたといつて置けばそれで満足する。これが此時代の子供には適するのである。鎌倉時代に、何某が、兵を何千人引率して、何處を攻めたといふやうでは却つて面白くないのである。

童話には、道德、宗教、科學、藝術等が含まれてゐる故、人心の發達に必要な種々の知能や感情の根柢になるのである。それ故、母が子供に話をするには、一々其譯を説き聞かさずとも、母自らは此處が道德に當り、此處が科學に當ると自覺して話すことが必要である。我國固有の童話の中には教育上有效のものが多くある。例へば桃太郎の話の如き、我國民精神を吹き込む都合のよいものである。其鬼ヶ島征伐は、日本人の海外發展を意味し、寶物を携へ歸つてお爺さんお婆さんに上げるといふのは、畏れ多いことではあるが、帝室の爲若くは父母の爲に盡すことを意味してゐる。故に斯る種類の童話は子供の教育に用ゐてよい。之を以て軍國主義の鼓吹であるなどいふのは餘り拘泥した僻見である。童話の中でも繼子虐めとか、道理に外れた慘酷な話とかその他西洋の童話によくある子供が姫を助けて王になつた話の如く、我國體と相容れぬものなどは、強いて聽かせる必要は無い。童話は學校に於ても、教材として用ゐるが、それよりも、家庭



に於て老人など暇ある人が話して聴かせた方がより効果が多い

次に此時期には空想の旺盛なために、虚言を言ふやうなことがよくある。虚言は不善として排斥すべきは勿論であるが、併し空想に原因するものは、決して漫りに叱る可きでない。自然的本能より出る所の虚言と、故意に虚言するものとは大に違ふ。空想に原因するものは、想像の盛なるがために経験せしことの無きにも拘はらず、実際に経験したる如くに思込む爲めであるゆゑ、悪意を以てするものと一概に断じてはならぬ。すべて此時期の子供には、容易に虚言せしめることが出来る。これ即ち彼等の虚言が空想に原因してゐる證據である。例へば、四五歳の子供を捉へて「お前は昨日上野へ行つてゐたらう」「いや行かない」「お前は忘れたね、昨日小父さんが行つた時に、お前は確かに上野にゐた」と、眞實らしく談ると、終には「それでは行つたのかしら」と思ひ、嘗て上野へ行つたことを思出して「行つた」と言ふやうになる。これは聯合作用に依つて、以前の経験を現在實際に行つたやうに考へる爲である。大人より見れば不思議に思はれるが、空想の盛な此時期の子供には普通のことである。故に子供はすべて正直であると断定するのは危険である。又子供のかゝる性情を知らぬ爲めに、何か子供に就いて取調べて白状でもすると、直ちに其罪を之に着せるやうな失敗をする事がある。斯る現象は大概六七歳位までにし

て終るのが常であるが、時としては十三四歳までもボンヤリして嘘を吐く者もある。親が人殺しをしたと證明して、冤罪を事實の如く白状した實例も此時期にあつたことである。これは皆精神が弱い爲めにかく間違へるのであるゆゑ、縦令嘘を吐いても、笑つたり叱つたりせず、それを正しく導いてゆくことが必要である。

此時期にはまた思想作用の基礎が現はれる。思想作用は、物と物との比較より始まる。大人が物を考へるのも亦事物の大小、優劣、性質等の比較が本になつてゐる。子供は、例へば菓子やうなものでも、自己のよりも兄弟などの大きいと必ず故障を言ふ。其時には既に比較作用が現はれてゐるのである。これは品行としては善い事ではないが、知性の方面より見れば大なる進歩である。併しこの比較作用も、それが十分發達せぬ間は、種々の間違がある。例へば小學兒童に於ても、比較作用のよく出来ぬ者は「アイ」と書かせると「マ」と書く事がある。假令それほど甚しく無くとも、此時期の比較は随分曖昧であつて、少しく類似の物を見れば皆同じやうに思ふ傾がある。

併しそれが少しく發達すると型念として、事物の辯別に關する纏つた考を頭の中に有するやうになる。例へば、始めて鶏を見させて母が「ト」と教へると、子供の頭には臙げながら鳥といふも



の、特徴を把握し且つ之に「ト、」といふ名稱を聯合する。そこで次に鳩、雉などを見せると、「ト、」といふ、これ即ち鶏、鳩、雉など所謂鳥類に共通なる特性(型念)を捉へてゐる爲めである。人類の知識の進歩する徑路は、此の如く一々の觀念に通有なる性質即ち概念を捉へ、次に其概念を以て新對象を解釋してゆくのである。されば少く注意してゐる親ならば、子供の言語に依つて、其子の知識の發達程度を察することが出来る。幼児が昨日「ト、」と教へられて、今日「ト、」といふ言葉を用ひれば、それは既に思想の働いてゐる證據である。

推理作用は、青年期以後に盛になるのであるが、此時期に於て既に道理を推してゆく作用が芽をふいてゐる。子供である故何も解らぬであらうと思ふのは大さうな間違ひで、三四歳の頃には不完全ながら論理學でいふ三段論法を自然に踏んでゆくことが出来る。或る五歳の一男兒は、半年程前に引越した元の家の前を、父親に連れられて通りながら、父から「これは坊の家だから此處へはいらう」と言はれて「坊の家でない」と言つた。「なぜ坊の家でないか」といふと、「お母さんが居ないから」と答へた。之を科學的に解剖してみると、三段論法に合うた推論となる。即ち己の母の在る處は我家なり  
此處には己の母在らず

故に此處は我家に非ず

といふ論式をなしてゐる。子供が此結論を下すには、母の在否が重要な事項となつてゐる。又此時期には統覺作用も行はれる。統覺とは物を理解する働きである。而して大人の理解と子供のととは、其形式は同じでも、内容に至つては異つてゐる。故に大人は自己の心を以て子供の心を推してゆくと、大なる誤に陥る。嘗て二葉幼稚園に於て取調べた結果によると、非常に面白い統覺の例がある。それは幼兒には古語や雅言が分らぬ爲めに謡へる歌に就いて甚だ滑稽なる統覺をなしたのである。紀元節の祝歌中にある「よろづの國」を「萬屋の國公」と考へてゐた子供があつた。これは自家の隣に萬屋といふ家がありそこに國公といふ友達があつたので、それを想出したのである。先生は熱心に紀元節のことを教へやうとしてゐるのに、子供の方では萬屋の國公が家に歸る事であるなどと考へてゐる。更に「なびきふしけん」を劍のことと思ひ「めぐみあまねき」を葱のことと思つてゐた。これでは折角の教育の目的も達せられぬ譯である。此の如く子供は子供らしい解釋より外出來ぬのであるゆゑ、何事も子供に理解の出来るやうに注意せねばならぬ。

此時期の感情作用としては、前の時期と同じく、恐怖、憤怒の如き、自己保存に必要なものが



中心となり、それに愛情、同情の如き愛他心が僅に芽を出してゐる。此感情に就ては、學齡期の條下に詳しく説明するゆゑ、此には唯嬰兒期と少年少女期との過程として、自己的感情に、僅に愛他的感情が萌え初めてゐることのみを述べて置く。

此時期の兒童は何事をなすにも遊戯としてとなければ出来悪い。嚴格な意味の眞面目の仕事は未だ爲すことは出来ぬ。遊戯とは、自由にして拘束なく、快樂を伴ふ所の動作であつて、運動して愉快に遊ぶといふの外、何等の目的ないものである。而して幼稚園時代の子供は非常に遊戯を好愛し、遊戯の裡に善良の習慣をつけ、且つ能力を練習して、將來社會に立つ日の準備をして置くのである。故に遊戯は幼兒の教育に極めて大切のものである。然るに在來の教育は、之を輕視してゐた。これは非常に間違つたことで、學校及び家庭に於ては、遊戯を中心として此時期の子供を教育せねばならぬ。而して其種類としては、玩具等に依つて自由に遊ぶこと、即ち自由遊戯を選ぶべきで、競争遊戯などはまだ早い。自由遊戯は實に此時期の特色である。

道德意識即ち善惡の意識は、此時期の兒童にはなほ存在せぬ。併しそれが次第に教育や環境に依つて啓發完成されるのであつて、先づ習慣が道德意識の發達する根本となる。即ち幼兒は平生の習慣に背けば不快を感じ、之に従へば快を感じる。故に習慣の善惡は、其人をして善若くは

惡に向はしむる本となるのである。成人に在つては善惡の判斷も出來、意志力も發達して居る故に惡いことは縱令習慣を破り不快を感じても斷乎として之を斥け得るのであるが、子供はまだそれだけに發達して居らぬゆゑ、習慣に支配されることが多い。されば幼兒期には、幼稚園に於ても家庭に於ても、善良なる習慣を養はしめることが大切である。子供に善良なる習慣を養ひ置かばそれを破ると不快を感じる故、自然に惡に遠ざかり善に親むことが出来る。此時期にかくして置かば、青年期に至つて眞の道德意識の完成を見るであらう。



## 第十講 兒童（四）

### 第十一章 少年少女の精神

**直觀期** 本編には少年少女期即ち學齡期兒童の心理に就いて其大要を述べ、且つそれに基づいた取扱上の注意を説明したいと思ふ。

先づ直觀期に就いて説明すると、子供は此時期に至れば、外界の事物、即ち山川、草木、蟲魚禽獸など、自己の耳に入り目に觸れる事物に就いて、大なる興味を有つやうになる。殊に自然物に對して多大の注意を拂ひ、其實物を見て之を自己の心に取入れる。此の如く外界の事物を實際に觀察するのを直觀といふのであるか。此時期の兒童は此直觀作用が旺盛である。若し兒童が健全であつたならば、ちつとして居らず、何所に花があるとか、何所に蜻蛉が止つて居るとか目を着けて、それを採つて來て、裂いて見たり碎いて見たりちぎつて見たりしてその状態を知りたがる。是は子供が自然界に適應する作用であつて、人間の總ての智慧の働きは、さういふ風に平素自然界の實際の事物に當つて、それを心の中に取り入れ、之を以て生涯の總ての心の基を造るので



ある。故に直観作用の旺盛な子供は、知識の基礎が固く且つ廣くなるゆゑ、子供を育てる人は此事に注意して、出来るだけ子供を郊外に導き自然物に接觸せしめるやうにするがよい。子供は何故かゝる事を爲すかといふに、詰りそれに依つて自己の知識を擴張するのである。前に述べた自己擴張が即ち是れである。

子供は家庭にのみ居る時は、其見聞の範囲が極めて狭く、其の内容が乏しい。唯家族の人と話すか、家の庭を見るか、或は隣り近所の人と遊ぶに過ぎずして、多くの外物に接する事が出来ぬ。然るに直観作用が發達して來るに隨ひ、自我の範囲が擴大して、廣く外界を経験するやうになる。かくて、終には其一々の實物に當らずとも自ら想ひ出されるやうになるのである。即ち山を直観し川を直観すると、後には一々山又は川を見ずとも、自然に山なり川なりが頭に浮ぶやうになる。故に子供に直観作用の盛に行はれるといふことは、人生に取つて極めて大切の事である。隨つて子供を育てる上には注意して直観を重んぜしめねばならぬ。佛教では萬法唯心といふが、それと同じやうに、子供が色々経験をすると、一切の事が皆心の中に入るのである。

吾々人類は廣い天地の間に誠に小さい身體を有つて生れて來たのであるが、目を瞑つて見ると廣大なる天地萬象が悉く頭の中に收まつてゐる。これといふのも直観作用がある爲である。それ

が若し非常に貧しい生活をして居つて、毎日食物が足らず、營養が良くないやうな、子供になると生れ付きの儘で、どの様な物があつても、それ程に好奇心を刺戟されぬゆゑ、自然に興味も起つて來ず、其爲めに知識の範囲も狭く低くなり、生活に迫つては悪い事をするやうになる。故に學齡に達した程の兒童にはあらゆる方面の事を見聞させる必要がある。斯様に學齡時期には一般に直観作用が盛んに現れて來ても、年齢の進むに従つて次第に弱くなるものである。併し曾て直観した事物は記憶に残つて居て、何時か復た再現される時がある。

記憶 人の生涯に於て、最も記憶力の旺盛な時は學齡期である。六七歳より記憶力が次第に強くなり、十四五歳頃に其絶頂に達し、二十歳頃までそれが續く。而して二十四五歳より三十歳位に至ると次第に衰へて來る。但しそれは機械的記憶であつて、見たり聞いたりした事物其儘記憶する力である。人にはかゝる記憶作用があるゆゑ、一旦記憶すれば、或は目の前に見えぬ物でも心に憶ひ起しさへすれば、何時でも必要に應じて出て來るのである。これがどれ程人の心を自由にするか知れぬ。故に兒童の記憶力の強弱を知るは大切のことである。一般人の記憶力の最も旺んなる時期に於て、他に比して物覚えの悪いのは、何所か身體に故障があるか、或は精神の作用に缺陷がある爲めであるゆゑ、最も注意せねばならぬ。記憶作用は精神諸作用中身體と最も密



接の關係を有する。身體が悪ければ、記憶が忽ち冒される。殊に睡眠不足とか、神經衰弱とか、何等か身體に悪い所があると、記憶が悪くなる。

外國語の如き機械的語記を要するものは、幼い時より始めねばならぬ。幼い時といふも、三四歳の極めて幼い時より始めるのは無効である。それも續けて教へれば宜いが、三四歳の頃より始めて六七歳で止めてしまふやうでは、何の役にも立たぬ。學齡期より始めるのがよい。學校で教育勸語を誦讀させると、頭を悪くするとか、腦を痛めるとかいふことを世間で喧しくいうた事があるが、是等は取るに足らぬ議論で、子供の精神の性質を知らぬ者のいふことである。此時期には勸語を誦讀するやうなことは譯もなく出来る。二十歳以上になると語記するに餘程の努力を要する。併し十歳前後の子供ならば少し練習すれば直ぐに覺えてしまふ。而してその覺えた所の勸語や君か代は生涯忘れやうとしても忘れられぬゆゑ、少しも心配せずに、子供がいやがらぬ限り誦讀させるがよい。

**想像** 此期の想像作用は前期より餘程變つて、範圍が限られて来る。即ち三歳乃至六七歳の頃の子供は、空想が盛んであつて、その想像する事物が實在であるか假設的であるかといふ區別が分らぬ。事實の如何に係はらず、唯だそれが面白くて堪らぬのである。然るに七八歳以後になる

と、現實的想像とて、同じ想像であつても、空想でなく、實際にある事に基づいて種々の事を心中に組立つて行く。例へば川はどうして出来るかといふやうな事を子供に想像させる。それは一々大きな川の源に伴つて行つて見せることは出来ぬゆゑ、其時は現實的想像に訴へ、其川の模型を見せ、實際のものとして想像させる。それには雨の降つた時に子供を庭に連れて行き、雨水が流れて一つの溝になつてゆく状態を観せる。さうするとそれが基礎となつて、大河の出来る状態を想像することが出来るやうになる。此の如く、何事も實際に就いて子供が想像してゆくのが現實的想像である。さればこの頃の子供の教育には直觀教授を用ひ實事實物に訴へて、現實的想像に導くことが大切である。

今其想像の對象を人形にとつて説明してみると、例へば婦人が人形を可愛がるといふことは、學齡期に於て最も盛んである。其前後に於ても、誰も人形を嫌ふ人はない。併し女の子供が人形を愛するのは、大概三歳頃より始つて漸次旺盛となり、十六五歳頃より其力が頗る弱くなる。それより後は單に人形を飾つて置くのみで、生きた人類の子供のやうにして可愛がるといふことは特殊の場合に限られる。今其人形の愛の起つて来る所を観ると、初めの間はそれがどんな恰好をして居つても構はぬ、空想が盛んであるゆゑ、座蒲團を卷いてそれを脊中に脊負つて催眠歌を誦



つたり、或はお猿さんと唱へて、唯頭の部分を圓く括り、手足が四つ出て居るやうな、何であるか譯の分らぬ物を抱いて嬉しがつて遊んで居る。それは大抵三歳か四歳の頃の子供の愛玩する物である。それが七八歳に至れば、完全に人の形をして居て初生児位の大きさの物を愛するのが普通である。故に此頃の人形には目も鼻もあつて、押すと泣くと云ふやうに、實際に近い物でなくてはならぬ。是が所謂現實的想像で、嬰兒を母や姉が抱いて居るのを見て、自分も欲しくて仕方がない。併し自分はそれを持つて遊ぶことが出来ぬゆゑ、それに類似の物を愛するのである。此想像が盛んになると、此人形は姫君であるとか、是は女中であるとか、是は悪い人であるとか、是は善い人であるとか云ふやうに、人形に人倫や性格を付け、或は名を付けて、着物を着せたり脱がしたり、食べ物を食べさせたり、臥かしたり、一切人間の通りに取扱ふ。是等は現實的想像の著しい例である。十四五歳より、十七八歳に至れば、人形の愛は全く變つて来る。英吉利のヴィクトリア女皇は、十四歳まで大さう人形を愛せられ、二百幾つも御持ちになり、其中の十四五は御自身で着物を着せられたといふことであるが、これも現實的想像の例である。

此の如く實際の物事に就いては想像力が強いゆゑ、獨り子のやうな他の兄弟や朋友の無い子供は想像的伴侶といふ物を作ることがある。これは眞に生きた友達が居るのではなく、人形と話を

したり、或は本の中に描いてある繪の人に話したりするので、つまり心中に想像によつて友達を作つて居るのである。子供が想像的伴侶を作るといふことは、他に接觸せずに、自分獨り狭い範圍内に於て想像して居るのであるゆゑ、餘りよいことではない。故に獨り子は成るべく友達を作り始終交際させるがよい。それには幼稚園に入園せしめて多くの人に接觸させるがよい。上流の家庭ではよく媒傳として老人を附けて置くが、此くして大人にのみ世話をさせるのは、一面からいへば注意が届いて宜いやうであるが、また他面よりいふと同年輩のものとの交際を缺ぐゆゑよくない。子供の世話をさせるには大人が宜いけれども、遊ぶ時には同年輩の子供を選んでやらねばならぬ。

前に幼児期に虚言するのは大して心配するには及ばぬといふことを述べたが、少年少女期の者の虚言には大に注意せねばならぬ。前期の虚言は主として空想より来るもので、自ら虚言と知つて之を語る積りはなかつたのであるが、此期の兒童のは企圖的の虚言が多い。例へば餘り叱られる故之を免れるやうにしやうとか、或は褒美が欲しい故虚言を吐いて之を貰はうといふやうに、何等か目的があつて虚言するのである。これは現實的想像の旺盛なるため、巧みに虚構するのである。かゝる場合には漫りにやかましく叱責せずに、靜かに其間違ひを正すと共に、將來のこと



をよく諭し、虚言は必ず發見せられるものであるといふことを知らしめ、何事も正直にする習慣を付けてやるやうにせねばならぬ。要するに此時期の虚言は前期のものよりも性質が違つて來るといふことに注意せねばならぬ。

### 戯曲本能

又此時期には戯曲本能とて、大人のすることや社會の種々の出來事を眞似て遊ぶやうな本能が盛んに現れて來る。此本能は兒童をして成人のなす演劇のやうな所作をなさしめるゆゑにかく名づけたのである。而して其最簡單のものは「まゝごと」である。「まゝごと」は、お客の接待を眞似たもので、小さな皿に茶の花や草の葉などを色々と盛つて、互に主人となり、客となり接待をして遊ぶのであるが、それは恰も俳優が色々の人物に扮して種々の所作をするのと同様である。若しそれが男子であれば、泥棒ごっこ、巡査ごっこなどをして遊ぶ。先年東京市に於て多數の議員が收賄に由つて投獄された時の如き、子供はその眞似をなし議員となり刑事となつて遊んだといふことであるが、此の如く子供は社會萬般のことを善惡となく眞似る。相撲が始まると相撲を眞似、スポーツが行はれると又之を眞似る。是等が所謂戯曲本能である。次第にそれが進んで來ると、學校で學藝會などをするやうになる。これは皆戯曲本能に基いたものである。此の如く戯曲本能によつて子供は乃木大將や東郷大將、或は加藤清正、楠木正成などを眞似て遊

ぶ間に、其知情意あらゆる精神力を練るのである。

かくして、子供は戯曲本能によつて社會を理解する。その爲めに子供の行動は社會化して、社會的色彩を帯びるやうになる。例へば女の子であれば、御客様ごっこをしてゐる間に、別に大人に指導されるまでもなく、自然に辭儀の仕方でも、客の取扱ひ方でも會得する。また男の子であれば加藤清正を眞似て居る間に、清正といふ人は斯ういふ立派な人であるから、この様な惡戯をしたり詰らぬ事したりしてはならぬといふ風に、自然に人の上に立つ者の人格を解するやうになる。此の如く、戯曲本能は其指導の如何に依つては、非常に有效のものである。また學校の學藝會の如きも、その方法の如何に依つては弊害も伴うであらうが、また其仕方に由つては種々の言辭禮儀作法等を習得する實際の便益ともなる。要するに此本能は指導の方法に由つて教育上有效のものである。

### 思想作用

思想作用は、前にも述べた如く青年期に達してより盛んに活動するのであつて、此時期に於ては未だ極めて幼稚のものである。即ち將來活動すべき思想作用の基礎が次第に造られてゆくのである。

人が物事を考へる手段としては、第一に言語が必要である。言語が無ければ考へる事は出來難



い。言語は思想の機關である。事物の經驗に依つて言語が出来、また其出来た言語に依つて益々思想が進んで行く。此の如く言語と思想とが互に相俟つて進歩してゆくといふことは、今日一般に學者の認めて居る所である。故に文化の進むに隨つて語彙が多くなり、且つ精細となる。我國では種々の言葉を以て言ひ表はす事を、布哇の土人は僅か一語を以て言ひ表はしてしまふ。例へば布哇で「アロハ」といふ語は我國の愛、親み、感謝、歓迎などに使ふ總ての言葉の意味を含んでゐる。故に御禮を言ふのか、親しむのか、愛するのか、仲好くしやうと言ふのか、一緒に行かうと言ふのか解らぬ筈である。布哇の土人同志では、固より理解が出来てあらうが、他の者には解り難い場合がある。此の如く文化の進むに従つて言語の数は殖ゑ、其表す所の意味は精細になる。これは未開人より文化人に進んでゆく徑路に於て現はれるのみでなく、個人が兒童より成人に發育してゆく間にも現はれる。即ち幼時には語彙が少いが、成人するに隨つて殖ゑて来る。子供が學齡期に覺える所の語数は、善惡に拘らず、非常に多いものである。故に此時期には家庭で誰も言つたことのない言葉を、覺えて来るなどのことがある。かくして語彙の増加してゆくことは、やがて思想作用の發達して来る基となるのである。

思想に關する教科には三通りある。話し方・書き方・読み方即ちこれである。是等は今皆學校で

教へて居るのであるが、此三者は自己の思想を他に傳へ、また他の思想を自己に受ける上に非常に大切のことである。従つて其手段として此三者を學齡期に教へるのも亦た甚だ大切である。學校の課程の基礎になるものは、種々あるが讀書算の三つは最根本的のものである。算数は、人が物を考へる上に大事なこと、これは思想を緻密にするの效あるものである。我國人の最大缺點は數の觀念に乏しいことである。古來我國に於ては數に對して注意を拂ふことを甚だ卑しいと考へて居た時がある。金錢に對して殊に其傾きが多かつた。故に經濟的觀念に乏しく、時間尊重の念が薄い。これは確かに我が國民性の缺陷である。故に小學校時代より數の觀念を養ふと同時に緻密に物を扱ふことに慣れしめねばならぬ。是がまた思想作用を敏活にする手段として大事のことである。

子供の讀書方の進歩してゆく過程を観ると、最初に(一)逐次讀をする。即ち一字々々拾ひ讀みをして行く。例へば、

ケフハサムイ

と書いてあると、尋常一年の子供等は、

ケ、フ、ハ、サ、ム、イ



と一字づつ讀む故、何の事であるか解らぬ。然るに少し進歩すると、(二) 逐次反復讀をする。即ち初め一度逐次讀みをして、復あとより繰返して見て、ケフハサムイ

といふ風に讀むのである。これは兒童讀書力の進歩する順序である。吾々が外國の書を読むに、よく讀み得ぬ間は此の如く一つづつ讀んで、それより復た繰返して讀む。次に第三段として、子供は(三) 通讀するやうになる。斯うなると文章其儘すらく讀めるので、初めから、今日ハ寒イ

と讀む。更に(四) 通讀反復理解とて、一度讀んで、更に今一度心の中に於て繰返し、何の事であらうと考へ、終には斯ういふ事であらうといふことが分つて来る。最後に(五) 通讀理解とて普通の書が讀めて、其意味も同時に解るといふ域に達する。最後の域に達せる者より見れば、讀解は容易なることのやうに思はれるけれども、書を読みつゝ理解しく行くのは中々難かしく且つ疲れる。小説のやうなものは面白く、すん／＼讀んでゆくゆゑ、さほどにも思はぬであらうが實は頭は大さう疲れるのである。何故かといふに、眼では引き續き文字を見て、すん／＼場面が變つて行くと共に、心の中では是はどういふ意味かといふことを理解してゆかねばならぬので、

色々心と心の複雑の働を要する爲めである。讀解作用を分析してみると、此の如く五段の順序を経て發達して来るので、書を読んで理解するに至るまでには複雑なる徑路を経てゐる。そこで吾々は書を読むことは頭を疲らせるものであるといふことを考へて、子供に同情してやり、彼等が學校で五時間も授業を受け、疲れて歸つて來た際、直ちに「本を讀みなさい」などと無理に強ひぬやうにせねばならぬ。復習させる必要があるならば、菓子をやるとか、遊ばせるとかして、少し息ませてからさせるがよい。

概念作用は純粹の思想作用であつて、唯一つ／＼の事物の觀念より、其等に通有の性質、例へば一つ／＼犬とか猫とかの觀念より犬や猫に通有の性質を抽出して、獸といふ觀念を造るの類である。少年少女期には既に多少の概念が出来るやうになる。特に十四五歳の頃はそれが著るしい。概念が出来るのは心の發達した證據であつて、これが出来る物に對する解釋が正しくしつかりして来る。哲學は思辨の學と稱して正しい概念を作る學問である。

斷定作用は思想の主要素であつて、物と物との關係を判斷してゆく働きである。即ち善惡正邪を比較して之を辨別するのである。併し少年少女期にはまだ正確なる斷定は出來難く次第に之に進むの過渡期にあるというてよいのである。



概念斷定と共に思想の要素を爲す所の推理作用も此時期に次第に現はれて来る。論理學の所謂三段論法は、人類の思想自然の徑路であつて、子供の心の働きも亦自然と此徑路をとるのである。併し、此時代には推理作用が尙ほ不完全であるゆゑ、動もすると間違つた思想の徑路をたどることがある。著者の相識れる某子爵が幼少の頃、某家に預けられて居て、その家の子供と共に遊んで居たが、或時其家の子供の靴と、子爵の靴とが出来て来た。然るに子爵の靴の先端は廣くして、其家の子供の靴は尖つてゐた。二人は之を比較して見て、「君のは先きが廣くて、僕のは狭いがどういふ譯であらう」と色々考へこんで話をして居たが、「分つた」と子爵が自己の考へを述べた。それは「君のは靴屋の店が小さいから狭いので、僕のは靴屋が大きいから廣いのだ」と言ふ結論に達したのであつた。是などは推理の形式としては、店の廣き靴屋にて造れる靴は先端廣し——我靴は廣き店にて造れり——故に我靴はその先端廣し——となつて、三段論法に適つて居る。けれども靴店の大小と靴の先端の大小との間に、果して本質的必然的關係があるかといふことを看過してゐる。すべて推理作用が正確に行はれるには、其人の頭腦が良く、しつかりして居らねばならぬ。三段論法は白痴でない限り、誰の心にも作用するものであるが、其正しいかどうかといふことは、人に依つて違ふ。此時代には、推理作用の初歩のものが現はれて来るのである。

るゆゑ、適當に指導して、其内容にも形式にも、間違のないやうに導いてやらねばならぬ。

統覺即ち物を理解する力は學齡期に達すれば、幼稚園時期よりは大に進んで来る。それは應用の出来るやうになつて来ることを以て證明し得られる。故に應用力の如何を觀れば、其子供の統覺の程度を知ることが出来る。子供が其習つた事をどういふ風に應用するかといふことに着目すれば、其の子の統覺がしつかりして居るかどうかといふことが分る。則ち習つた其儘を書くとか其儘に讀むとかいふのでなしに、之を種々に應用することが出来れば、其子供の統覺は發達してゐるのである。而して正常の發達をして居る子供ならば、應用の才は此頃に漸次に發達して来るものである。今後の教育は、習つた事が子供によつて如何に應用されるかといふことを見ねばならぬ。今までは覺えて居るか否かといふことに重きを置いたが、それでは足らぬ。

感情 學齡期の子供には喜怒哀樂愛惡欲の七情が明かに現はれる。此種の情を情緒といふのであるが、つまり此時期には總ての情緒が現れるのである。感情の中でも、知性と密接の關係を有する情操は、尙ほ不充であるが、情緒は大概此時期に現はれる。七情の中、欲は意志として見るべきであるが、此時期には其他の六情に加ふるに羞耻の情、名譽の情が現はれる。此等は皆精神の發達に必要なものである故、大切に取扱ひ、適當に指導せねばならぬ。殊に羞耻の感情は



人格の修養上極めて尊いものである。子供は其幼い時は耻かしいといふことを知らぬ。人の前で裸體になつても何とも思はぬ。然るに學齡期に入る頃より耻かしいといふことを知つて来る。是は社會的感情の一種であつて、假令それが發現しても、周囲より培養されねば消えてしまふ。故に環境に耻知らずが多ければ、其中で育つた子供は羞耻心に乏しくなる。不良少年少女等は、盗んで來た物を己れの物にするのは、當然の事のやうに思つて、少しも耻ぢる心がない。是はその初かゝる行爲をなした時に、周囲がそれを非難せぬ爲めに耻かしいといふことを經驗せぬのである。故に此情は社會的に周囲の者が注意して適當に導いてやらねばならぬ。それに就いては羞耻の情を虚榮心と結びつけぬやうに注意する必要がある。女はよく着物の粗末なのを着るのを耻かしく思ふが、これは虚榮心であつて、羞耻の情は自分が悪い事をしたり、物が出来なかつたりするのを恥かしがかるやうに導いてゆかねばならぬ。

更に此時期の凡ての感情の特色を擧げて見ると、初めは我儘のものである。何所の子供でも殆んど同情などはない。詰り(一)主我的であつて、自分さへ善ければ宜いといふ考を有つて居る。それから何時も(二)現在の事のみを見て、後の事も過去の事も考へぬ。又喜ぶにもひどく喜び、憤るのもひどく憤る。これを(三)激情といふのである。又是等の感情は甚だ(四)變化

し易く、今まで大さう仲好く遊んで居つたかと思ふとすぐ喧嘩をする。喧嘩するかと思ふと復笑つて二人で遊ぶといふ風に、感情の變動が甚しい。又大人ならば喧嘩でもすると生涯物を言はぬ者さへある。然るに此期の子供は直ぐに憤るがまた直ぐに解けてしまふ。つまり(五)一時的で長く續かぬ。

此の如く主我的にして、感情の發現が激しく且つ變化し易いのは、七八歳より十四五歳に至る間の子供の感情の特色である。併し長ずるに従つて次第に變つて来る。全體として此期の感情は性質のよくないものが多いやうに思はれるが、實はその中より、善い情が芽を出して來るのである。子供が我儘をしたり、亂暴をしたりするのは柿に澁があるやうなものである。澁い一方では良くないけれども、澁の多いだけ熟してから甘い味が出て来る。子供も我儘で仕方がないといふ中より、漸次に同情や愛情が出て來るのである。故に家庭に於ても、學校に於ても、適當にこれを指導し、又刺戟することが甚だ大切である。即ち子供は母の命令を聽かずに我儘をしてゐるけれども、時には困つて居る人があると、自分の持つて居る物を其人に遣るとか、或は母の脊を叩いで上げるとかいふやうな殊勝なことをする。かういふ場合には、之を利用して、「さういふ行は善い事である。いつもそのやうにせねばならぬ」と褒めてやれば、此中から漸次善行を喜ぶ情が



出て来る。

古來世に偉人と謂はれてゐる人々の多くは、其幼時随分亂暴であつた。併し亂暴をするのが偉人であるといふのではないが、偉人は皆亂暴をする程活動力に富んでゐた。故に子供の幼時の亂暴の如きも其方向を變へて善い方に導かねばならぬ。亂暴も偉人の活動力も同一の力であつて、其向き方に由つて善にもなり惡にもなるのである。故に亂暴の子供はその方向轉換を圖つて活動力を善い方に向けねばならぬ。兎に角此時期の子供は道德上より見ると常に惡いことのみして居るやうに思はれる。併し人の母たるものは、自己の子供のみ惡いのであらうと落膽せず此頃の子供は暴ばれて親を泣かすのが普通であると思ひ、十分注意して其力を善良なる方面に向はしむべきである。

**好闘本能と狩獵本能** 此時期にはまた好闘本能が強く現はれて、他と争ひ喧嘩することが多くなり、或は人と衝突し、或は蟲や獸を苛めるなど、残忍性として現はれる。即ち十歳前後の子供は、蜻蛉の首を切つたり、羽根をもぎつたり、雀を捕へたり、蛇を捕へて之を殺したり、蛙に灸をするたりする。それは善くない事であるゆゑ止めねばならぬけれども、絶対に之を禁止することは出来ぬ。何となればそれは自然の本能として現れて来るので、人類の發達に必要であるが爲

めである。故に斯る場合には、「犬も、猫も、鳥も皆お前の家來であつて、お前は其大將であるゆゑ、自分の家來を酷い目に遭はせるのは宜くない。可愛がつてやらねばならぬ」といふやうに諭して、子供に自尊心を持たせねばならぬ。何事に由らず子供を詰らぬ者のやうに見做して叱責し罵罵する事は甚だよくない。「お前は強い男であるゆゑ弱い女の子供をいぢめてはならぬ。男は多少自分に不利益の事があつても弱い人を助けるやうにせねばならぬ」とか、又「鳥や獸を捕るのは宜いが、苦めずに殺してやらねばならぬ」といふやうに諭してやるがよい。

又狩獵本能として、狩を好む本能が現れる。鳥獸蟲魚などを捕ることの面白くなつて来るのは此時期である。曾て六歳の男の子が他より贈られた鴨を抱いて少時も離さず、ねんねを言つて居たのがある。これは別に脚がどうであるとか、嘴がどうであるとかいふやうな事を觀察するのでなく、唯だ鴨を持つて喜んで居るので、詰り狩獵本能の發現して動物に興味を有つに至つたのであらう。それで此の時期の子供に、一切動物を捕らせぬのはよくない。唯だ悪いのは慘酷の取扱をすることである。故に一旦捕へても晩には逃がしてやるといふやうにすればよい。但しそれが害蟲であれば、之を捕へて殺させる必要もあらう。害蟲を捕へさせることは、子供の本性を満足させると同時に、知識を擴め善を行ふことゝもなる。



名譽心 名譽心も亦此時期に現れて来る。二歳や三歳の幼ない子供では、褒められても貶されても解らぬゆる平氣で居るが、名譽心が發視すれば賞罰が刺激を與へるやうになる。學齡期前にも多少の名譽心はあるけれども、極めて漠然として居る。

抑々名譽心の根源を究めて見ると、注意集注慾が其原因となつて居る。この慾は人が自己に注意して呉れるのを喜ぶことである。二三歳の子供は、父母なり兄弟なりが其對手をしてやると大さう喜ぶが、誰も共に遊んで呉れぬと泣き出す。是は子供の時より注意集注慾がある爲めである故に子供には他の注意を集める爲めに自己表示本能といふものが現れて来る。即ち自己を他に表はし示す所の本能である。但し是は人によつて強弱のあることは勿論である。今此本能を例を以て示せば、子供が七八歳にもなると、傍らに珍しい人でも居れば、騒いだり、帽子を抛つたり、高い所から飛び降りたり、木に登つてから呼んで見たりして、人の注意を喚ぶ。それは自己を表示することが大さう愉快になつて来る爲めである。それが次第に年頃になつて来ると、着物がどうであるとか、身なりがどうであるとか言うて、總て人の注意を自己に集注させやうとするやうになる。

高等學校時代の學生などには、寒中に單衣を着て歩いて居る者さへある。實は寒くて慄へて居

るのであるが、我慢をして威張つて居る、或は洋服に高足駄を履いて大手を振つて歩いて居る。是等は詰り奇抜の事によつて自己を表示して喜んで居るのである。婦人が年頃になつて美しい着物を着たがるのも亦之と同じことである。流行といふことも要するにこの本能が本となつて起つて来るのであつて、人と同じやうな物を着て居ては誰も目を付けて呉れぬ故、奇抜な物を着るのである。さうするとそれを眞似てまた他の人も同様のものを着るのである。女の底髪の如きも初めは各宮妃殿下が御洋装にて帽子をお被りになる時、あゝいふ鬚でなくてはならぬのでお始めになつたのであるが、今日は何所に行つても、それが一般に行はれ毫も珍しくないやうになり、既に流行では無く我國婦人の風習の一となつた。そこで何か變つた物を始めやうと苦心して居る所へ斷髪が歐米に於て行はれるやうになり我國にもそれが流行して来たのである。要するに流行は一時的のものであるが、それが永續して行はれるやうになれば風習となるのである。

呉服店に来て品物を見る婦人の中には「何か變つた物を見たい」と言ふ者が多い。これも畢竟一般と異つた物で他人の注意を惹きたいためである。而して斯る欲望は子供の時に既に現はれてゐるのであるゆる、其指導を誤れば虛榮心を誘致する。虛榮心と名譽心とは頗る似てゐる。併し自己の身體に相應せぬ美しき服装をなして、人に誇り、それで満足するは虛榮心であつて、自己の



徳を磨き、人格を高め社會の爲めになる事をして、人の賞讃を得るといふのは名譽心である。されば名譽心は人を刺戟すること多大にして、道徳に導くに有益のものである。之に反して虚榮心は個人に取つても社會に取つても、有害無益であつて、其爲めに個人は生涯を誤り社會は浮華に陥る虞がある、されば此點に關して子供の指導によく注意せねばならぬ。子供に對する賞罰の如きは、子供自から成した事に對しては適當に褒めてやるがよいが、人にして貰つた事を子供のした事として褒めてはならぬ。また自ら成した事は縱令やり損つた時でも、其努力を認めてやらねばならぬ。殊に女子を育つるには、虚榮心に就いて最も慎重に誠めねばならぬ。女子の社會に於ては美服を着てゐればもてはやされ、さもなければふり向きもせぬのが多い。故に時としては着物の方が命よりも大切であるといふことにもなる。それは虚榮心の極端なものである。故に子供には幼時より眞の名譽心を養はしめねばならぬ。乃木大將の歌に、

ものゝふは、こがねもたまも、なにかせむ。

いのちにかへて、なこそをしけれ。

といふのがあるが、此歌意の通り、財産を如何に澤山持つても、そのみでは足らぬ。時としてはそれが身を亡ぼす基ともなる事がある。それよりも人は名譽が大切である。死後までも世にた

へられ、祖先の美名を揚げるやうにと努めねばならぬ。現時は虚榮心跋扈の時代で、これを此儘にさし置く時は、社會は濟ふことの出来ぬやうな状態となるであらう。之を匡正するには、子供の時より虚榮心を挑發せぬやうに導いて、漸次社會を改良せねばならぬ。

**英雄崇拜** 上述の如く此時期には名譽心が盛になるゆゑ、名譽を得た人を大に尊敬して、それを慕ふ心が起つて来る。英雄崇拜というても、子供にこの心の起る初は極めて單純である。子供にお前は誰のやうになりたいかと尋ねて見ると、彼等はすべてそれ相當の答をする。これが英雄崇拜のもとになるのであつて、それには凡そ四つの段階がある。即ち最初は(一)空想的である。例へば桃太郎の話をして、「御前は鬼になりたいか、桃太郎になりたいか」と言へば、大抵の子供は皆「桃太郎になりたい」と言ふ。「なぜ桃太郎になりたいか」と聞くと、「桃太郎は力が強くて、鬼ヶ島から澤山寶物を分捕り、それをお爺さんお婆さんに差上げて親孝行をしたから」と答へる。それで遊びの時に誰か鬼にならぬかと言うても、鬼になり手が無い。仕方がないゆゑ、大きな人が鬼になつて、小さい子供を桃太郎にしてやるといふのが普通である。これを眞の英雄崇拜に達する第一段階の發達とする。

次には(二)現實的となる。是は前の童話的時代より移つて社會的時代になつたのである。而



して其所謂社會には二種ある。即ち直接的現實と間接的現實とである。直接的とは、自分が直接に見る所のものを崇拜の對象とすることで、例へば軍人が劍をさげて、多くの人より羨望されて居るのを見ると、自分も大きくなつたら軍人にならうと思ふが如き類である。日清日露の戦争當時は子供の軍人を崇拜することは非常の勢であつた。又間接的といふのは自己が直接見たのではないが、新聞や雑誌で見たり、父母兄弟の話で聞いたりして、間接的に崇拜の對象を作ること

をいふのである。子供が現實の社會に於ける英雄を崇拜するには以上の兩種がある。併しさういふ状態は永く續くものではない。即ち子供が學校に入つて歴史などを習ふやうになると、(三) 想像的崇拜が生ずる。例へば菅原道真公は偉い。自分もあゝいふ人になりたい、二宮尊徳先生は偉い。自分もあゝなりたいといふやうに、歴史中の偉人を選んで、それに同じやうになりたいと希求する。これは時として生涯の標準になることもある。私は四歳の頃は菅公が好きであつたけれども、六歳の時頼山陽の天草洋の詩を父が吟じて居るのを聞いてから、山陽先生を崇拜するやうになつた。後には變つたけれども、今でも山陽先生は好きである。それは第三段の發達である。

更に進めば(四) 理想的となつて来る。理想的の英雄崇拜は即ち所謂宗教心である。此段階に至れば釋迦、基督、孔子の如き偉人中の偉人、即ち、人間を超越したやうな人を、佛とし、神とし、或は聖人として崇拜するやうになる。これ英雄崇拜の最後の段階である。此英雄崇拜、特に理想的宗教的人物崇拜は、人の品性を養ふ上に甚だ大切のことであつて、人は心中に其理想とする所が無ければ墮落し易い。父母は何時までも一緒に居るものではないゆゑ何時までも注意をして貰ふ譯にはゆかぬ。また其師も之と同様である。然るに心中崇拜する所の偉人は行往坐臥常に自己の身邊を離れず注意して呉れ、勵まして呉れる。逆境にあつては自己を勵まして呉れ、順境にあつては自己を警めて呉れる。併し此理想的といふ段階は小學校時代に出

来るものではない。此には順序として述べたのであるが、學齡期兒童の崇拜は半ば現實的であつて、半ば想像的の段階にあるのが普通である。

遊戯 此時期の遊戯は前期と異なり、團體的となり、仲間を拵へて遊ぶことが多く、一人で遊ぶことは少ない。即ち團體的若くは社會的、秩序的の遊戯が起つて来る。兒童は遊戯に由つて其精神及び身體の發達を遂げるものであるゆゑ、其種類を選んで盛に遊戯せしめねばならぬ。

所有本能 此時期には、また所有本能とて、物を自己の所有にしたいといふ本能が起つて来る。子供には、三四歳の幼時より、品物を自己の手に取りたがる念が現はれて居る。併し其頃は



未だ所有觀念が明かでない、他人の物と自己の物との區別がはつきりして居らぬ。然るに學齡の頃に至れば其區別が確然と分るやうになつて来る。而して他人の物といふことを知りながら、尙ほ自己の物にしたいとの念が盛に起る。所謂欲望の時代である。故に此期の指導を誤ると、眞の窃盜にならぬとも限らぬ。それを防ぐには、初めの注意が肝要である。即ち親は子供が七八歳にもなれば、時として他人の物を黙つて持つて来る事もあるといふことを豫め知つて居り、其初めに注意を怠つてはならぬ。

然らばどの様に注意するかといふに、前述の如きことを行つた時は、初めより漫りに叱つてはならぬ。家庭に由りてはかゝる場合に子供を非常に折檻し藏に入れたり打ちさいなんだりするものもあるが、さういふ事をするに却つて反抗心を起して親の命に背いたり、自暴自棄になつて、ますます悪い事をしたりする虞がある。されば、子供に向つて徐ろに「お前は知らなかつたのであらうけれども、他人の物に手をつけるのは非常に悪い事である故、是から後、どの様に欲しい物があつても、両親に告げずに取つてはならぬ。若し何か要る物があれば買つて上げるゆゑ、他人の物には決して手をつけてはならぬ。お父さんの物でも、姉さんの物でも、兄さんの物でも、その他誰の物でも、許しを受けてからでなければ取つてはならぬ」といふやうに訓諭して、若し

其子の要求した物が適當の物であるならば買つてやり、不要のものであつたら決して與へぬやうにして、よく注意して誠める。かくして子供に良習慣をつけてやるがよい。

### 宗教意識

人には宗教心のもとになるものがある。「私には宗教心は無い」と言ふ人があるが、それは自己を知らぬのである。罪を犯すやうな悪漢でも、罪名が定つて死に就く時には、念佛を唱へるものさへある。これは宗教心の土臺があるからである。信仰としては何の神を信じ、何の佛を信ずるといふことはないにしても、其宗教心の根はあるものであつて、それは學齡期になると現はれて来る。尤も其要素は以前よりあるのであるけれども、此頃より其意識が確かになつて来る。それは如何なるものであるかといふに、誰にも恐怖心があり、愛情があり、信頼の情があり、感謝の念があり、欽仰の心がある。欽仰とは、自己の信ずる人の行を嘆美する情である。子供は社會的に自然にかういふ感情を養成せられて居る。然るに此等の諸要素が神佛に結びついて始めて宗教心になるのである。而して此等は皆其親に對して最も早く起る所の情である。親といふものは幾らか怖いものであるゆゑ、子供は之に對して多少の遠慮をするのであるが、また他方には親を愛し、親に親み、殊に親に信頼して居るものである。即ち父母が側に在ると子供は安心して居るが、居らぬと泣き出す。これは親を信頼してゐる爲めである。此等は皆宗教心の本とな



るものである。

會て著者の家の焼けた時、兄は四歳であつて、座敷に寝かしてあつた。それが皆が愈々他に移らうといふ時驚きて目を覺まし、母に抱かれて乳を呑んで寝たいと言つて泣いたといふことである。子供は實にかゝる場合に於ても親に信頼して居るのである。かういふ心を、神佛に持つてゆくとそのまゝ熱烈な信仰になる。どんな危い事があつても、神佛に信頼して居れば安心であると思ふ心は信仰に外ならぬ。故に子供に宗教心を養つてゆくには、かゝる點より出發せねばならぬ。然るに不良少年少女の多くは、両親が冷酷であつて、誰に頼らうといふ當てもない所より悪くなつてゐるのが多いのであつて、彼等には感謝欽仰などの念は殆ど無い。かゝる状態では宗教心や道徳心の起りやうはない。それで自然他人の物を盗つたり、人を害したりするやうになるのである。かゝる子供に「お前はなぜこの様な悪い事をしたか」と言へば「お腹が空いたから盗りました」と言ふので、叱りやうも無い。憐れな者もある。

彼等の如く信頼すべき親を有せぬ者にとつて、其両親に代るべきものは即ち神佛であらねばならぬ。神佛は人と異つて、未來永遠に變化せぬ對象であるゆゑ、子供をして之に依つて漸次宗教的信仰を得しめねばならぬ。抑々宗教心の起りは、人類が自然物に對して恐怖を有つ所に存する

のである。古代の人類や未開人は、山岳河川などに對して恐怖を懷き信仰した。日本の太古に於てもさうであつた。此の如く人類の發達過程に於ては、天然物を怖れて之を崇拜したのであるがこれが個人の發達過程たる兒童期にも現はれる。即ち兒童は自然物を怖れる。殊に高い深い山などを怖れる。是に於て自然崇拜といふことが起つて來る。

併しこれを自然の儘に委して置くと、昔の野蠻人のやうになる。それに對しては社會的事情と周圍の影響があつて次第に文化人の如き信仰に導かれるのである。即ち朝晩父母は御勤めをしたり、日曜日には教會に出たりして敬虔の態度を以て神佛を拜んで居ると、幼兒は模倣によつて初めは何の意味もなしに紅葉のやうな兩手を合せて居るが、それが後に眞の信仰心を生ずるものとなるのである。而して眞の宗教心の發現は十八九歳より二十四五歳の間に多い。此宗教は一度起れば一時忘れられても復た起る。故に子供の時より此心を養つて、自から自己の行爲を省みてゆくやうに導くことが必要である。

### 意志作用

人の意志作用は年と共に進んで行くものであるが、此頃の子供の意志作用の進歩は主として注意力の發達として現はれる。幼稚園時代の子供の注意時間は五分以上續かぬのが通例であるが、それが學齡期の初めには十分より十五分間位も續くやうになる。十歳前後になれば、



二十分より二十五分位、學齡期の末になつては三十分間位も續くやうになる。注意は意志を以て續けるのであるゆゑ、意志が發達すると、注意を擾す刺激に抵抗し、之に打克つやうになる。子供を教育するには此間の消息を知つて置くことが必要である。家庭に於ては、子供に自己の事は自己にさせる。即ち自己の部屋は自己に始末をさせ、自己の物は自己に整頓させるやうにして、意志を養ひ、實行の習慣をつける。かくして置けば、暑くても寒くても、自己の爲すべき事は、自ら實行する習慣がつくやうになる。

**道德意識** 子供の道德意識は如何にして發達するかといふと、凡そ道德には外部より餘儀なくされ習はしとなつて行はれるものがある。之を他律的道德といふ。然るに道德は其本義として他律的であつてはならぬ。必ず自律的でなければならぬ。自律的といふのは、自己で自己の心を律してゆくので、人が知つても知らぬでも、悪い事をしたならば悔い、善い事をしたならば満足する心である。然るに子供の道德は初め他律的であり、一定の時に達すると、漸次自律的の道德心が起つて来る。學齡期には尙ほ他律的であるゆゑ、他より此事は善い事である故せねばならぬ、これは悪い事であるゆゑしてはならぬといふやうにして導き、道德的習慣をつけてやらねばならぬ。さうすると漸次自律的になる時が来るのである。

それで、小學校時代には、家庭に於ても學校に於ても、規律を立て、惡事に遠ざからしめ、賞罰によつて善惡を明にすることが必要である。眞の道德意識の發達して居らぬ人は、大人でも他律的であつて、法律で罰せられたり社會人から非難されたりする爲めに悪い事をせぬが、さもなければ悪い事を行ふことが多い。子供も初めはこれと同様であるゆゑ、規律を正しくし、賞罰を明かにして他律的に道德に親ませねばならぬ。世の父母の中には自己の機嫌の悪い時はひどく罰し、善い時は漫りに子供を我儘にする者があるが、かゝる者は子供の道德意識を混亂させる處がある。されば自己の氣分如何に拘はらず、善い事は善いとして褒め、悪い事は悪いとして叱るといふやうに、賞罰を明かにすれば、道德意識は完全に發達する。

## 第十二章 結論

以上十講は、著者が結婚前の婦人を對象として、其豫め知り置くべき事項の大略を講述したものに基いて、加除添刪したものである。併し、單に結婚前の婦人に限らず、一般婦人は勿論、男子に取りても、その有用なる事は勿論である。講述の順序は、讀者が既に諒得せられて居るであらうが、先づ吾人の過去、即ち吾人の由つて来る所の祖先より説き起し、之に由りて我が國體



と我が家庭との特色を示し、それより吾人の現在、即ち家庭に於ける物心両面の注意事項を詳説した。此の部分が、本講の主題である。更に第七講以下に於て、児童心理の一斑を講述して、家庭當然の結果として、吾人の重大なる責任である育児教育の事に論及した。吾人が、家庭を作るに就いて有す可き知識の之に止まらぬことはいふ迄も無いが、今は一定講課の中に、特に婦人の爲めに、其の概要を述べたに過ぎぬ。

然れども、此書が現代の青年男女に由りて讀まれなば、彼等が將來家庭を作る上に將た現在家庭生活を営む上に、多少の参考たる可き事は、著者の自ら期待する所である。現代の根柢なき思想に動搖せられ、自己は暗中の煙火の如く、由つて來る所も知らず、進みて往く所も知らず、唯本能の儘に兒子を生産して、その教育にさへ心を用ゐぬ者は、この書に由りて自己の責き所以、人類の他の群生に類を抜ける所以、更に自己が宇宙生命の一連鎖として、如何に重要な地位に在るかを知つて、家庭に於ける日々の果敢なき業務に、甚深微妙の意義あることを見出すであらう。著者は、我が國民男女の別なく、一人も多くが、此書を通して、著者に共鳴同感せんことを望んで止まぬ。(終)

第貳拾貳回配本

昭和四年十月十二日印刷 昭和四年十月十六日發行		非 賣 品	不 許 複 製
『家庭科學大系』		編 輯 人 賀 川 豐 彦 東京市本所區松倉町貳丁目八拾五番地	發 兌 東京市芝區愛宕町二丁目六番地 家庭科學大系刊行會 振替東京五一五五一番
發行兼印刷人 福 島 卓 東京府荏原郡大井町二七四番地		所 刷 印 廣 瀨 所 刷 印 東 京 市 芝 區 愛 宕 町 二 丁 目 六 番 地	



次號豫告

日本畫概說

文學博士

瀧

精

一

婦人服・改良服

福

岡

や

子

家庭で  
出来る日本菓子の造方

秋

穂

敬

結婚前後の注意

吉

岡

彌

生

結核病とは何か

醫學博士

小

酒

井

光

次

女中の扱ひ方

三

宅

や

子

スキ―術

高

橋

翠

郊



